(P. 327 定理15.1)

1) $\Gamma(x)$ は x>0 で連続、さらに、 C^{∞} 級であり、任意の $n\in N$ に対し n 階導関数は次の式で与えられる。

(15.2)
$$\Gamma^{(n)}(x) = \int_{0}^{+\infty} e^{-t} t^{x-1} (\log t)^{n} dt$$

2)log $\Gamma(x)$ は x > 0 で凸関数である。

(証明の前にn=1として確かめてみる。)

(15.2')
$$\Gamma'(x) = \int_{0}^{+\infty} e^{-t} t^{x-1} (\log t) dt$$

$$x \in I = \{x \in R \mid x > 0\}, t \in J = \{t \in R \mid t > 0\}$$
 とおく

a) 定理12. 1から
$$x > 0$$
 ならば $\Gamma(x) = \int_0^{+\infty} e^{-t} t^{x-1} dt$ は収束する。

b)
$$y = e^{-t}t^{x-1}$$
 として、 $\frac{\partial y}{\partial x} = e^{-t}(\log t)t^{x-1}$ は $J \times I$ で連続である。

$$c)$$
 $G(x) = \int_0^{+\infty} e^{-t} t^{x-1} (\log t) dt$ が I 上広義一様収束することを示す。

任意の
$$\alpha > 0$$
 に対し、 $\log t = -x$ と置けば、 $e^{-x} = t \rightarrow e^{-\alpha x} = t^{\alpha}$

$$(e^{-x} = \frac{1}{e^x} = t \quad (x \to \infty \iff t \to +0))$$

$$\lim_{t\to 0} t^{\alpha} \log t = \lim_{x\to \infty} -xe^{-\alpha x} = \lim_{x\to \infty} -\frac{x}{e^{\alpha x}} = 0$$

よって、
$$\frac{\log t}{t^{-\alpha}} = t^{\alpha} \log t \rightarrow 0 \ (t \rightarrow +0)$$
 だから、 $\log t = O(t^{-\alpha}) \ (t \rightarrow +0)$ とな

る。そこで、
$$f_1(x,t) = e^{-t}t^{x-1}(\log t)$$
 とおけば

$$\frac{e^{-t}t^{x-1}(\log t)}{t^{x-\alpha-1}} = \frac{e^{-t}(\log t)}{t^{-\alpha}} = e^{-t}(t^{\alpha}\log t) \to 0 \ (t \to +0)$$

よって、
$$f_1(x,t) = O(t^{x-\alpha-1})$$
 (t →+0)

だから、 $\forall x > 0$ に対し $0 < \alpha < x$ となるように α をとれば

$$0 < \alpha < x \rightarrow 0 < x - \alpha$$
 であり

$$f_1(x,t) = O(t^{\beta})$$
 ($\beta = x - \alpha - 1 > -1$) となり $\int_{-0}^1 f_1(x,t) dt$ は絶対収束する。

(補足1)

定理11. 3、2) において、 $\int_{-b}^a f(x)dx$ の場合、 $f(x) = O((x-b)^\beta)(x \rightarrow b+0)$ と置き換わる。 それは、絶対収束を考える場合、 x-b>0 となる必要があるからだ。 よって、本証明では、0-t ではなく、 t-0=t となり、 $f_1(x,t)=O(t^\beta)$ ($\beta=x-\alpha-1>-1$) でよいことになる。

ここで、 $x_0 > 0$ を固定すれば、

任意のmに対し

$$\frac{e^{-t}}{t^{-m}} = \frac{t^m}{e^t} \to 0 \ (t \to +\infty) \ (P. \ 115), e^{-t} = O(t^{-m}) \ (t \to +\infty)$$
と合わせて

$$\frac{f_1(x,t)}{t^{x-1+1-m}} = \frac{e^{-t}t^{x-1}(\log t)}{t^{x-1+1-m}} = \frac{e^{-t}(\log t)}{t^{1-m}}$$

$$=\frac{e^{-t}}{t^{-m}}\times(\frac{\log t}{t})\to 0 \ (t\to+\infty)$$

 $f_1(x,t)$ = $O(t^{x-m})$ $(t \rightarrow +\infty)$ を得るから、m を十分大きくすれば、

x-m < -1 として、定理11.3、1) より、

$$\int_{1}^{+\infty} f_{1}(x,t) dt$$

が<u>絶対収束</u>することがわかる。 さらに $x_1 > 0$ を固定したとき、 $x \le x_1$, $1 \le t$ で、

$$|f_1(x,t)| = |e^{-t}t^{x-1}(\log t)| \le |e^{-t}t^{x_1-1}(\log t)| = |f_1(x_1,t)|$$

だから、この積分は $x \leq x$ 、で一様収束する。($|f_1(x_1,t)| = M(t)$ とする)

ここで、 $0 < x_0$, x_1 は任意だったので、 $x_0 = x_1$ としてもよい。よって、広義積分(15

.2') の右辺が I 上一様収束することがわかった。したがって、定理14. 4から (15.2') が成り立つ。END

(n の場合の証明) 1)任意の $\alpha > 0$ に対し、 $\log t = -x$ と置けば

$$e^{-x} = t \rightarrow e^{-\alpha x} = t^{\alpha} \left(e^{-x} = \frac{1}{e^x} = t \left(x \rightarrow \infty \iff t \rightarrow +0 \right) \right)$$

$$\lim_{t\to 0} t^{\alpha} \log t = \lim_{x\to \infty} -xe^{-\alpha x} = \lim_{x\to \infty} -\frac{x}{e^{\alpha x}} = 0$$

よって、
$$\frac{\log t}{t^{-\alpha}} = t^{\alpha} \log t \rightarrow 0 \ (t \rightarrow +0)$$
 だから、 $\log t = O(t^{-\alpha}) \ (t \rightarrow +0)$ とな

る。そこで、
$$f_n(x,t) = e^{-t}t^{x-1}(\log t)^n$$
 とおけば

$$\frac{e^{-t}t^{x-1}(\log t)^n}{t^{x-n\alpha-1}} = \frac{e^{-t}(\log t)^n}{t^{-n\alpha}} = e^{-t}(t^{\alpha}\log t)^n \to 0 \ (t \to +0)$$

よって、
$$f_n(x,t) = O(t^{x-n\alpha-1})$$
 $(t \to +0)$

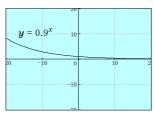
だから、 $\forall x>0$ に対し $0<\alpha<\frac{x}{n}$ となるように α をとれば

$$0 < n \alpha < x \rightarrow x - n \alpha > 0$$
 であり

$$f_n(x,t) = O(t^\beta)$$
 ($\beta = x - n \alpha - 1 > -1$) となるか

ら
$$\int_{-0}^{1} f_n(x,t) dt$$
は絶対収束する。

ここで、 $x_0 > 0$ を固定すれば、



 $x_0 \le x$, $0 \le t \le 1$ で t^x は単調減少であるから、定理14. 2より、

$$|f_n(x,t)| = |e^{-t}t^{x-1}(\log t)^n| \le |e^{-t}t^{x_0-1}(\log t)^n| = |f_n(x_0,t)|$$

 $\mid f_n(x_0,t)\mid$ = M(t) とすれば、 $\int_{-0}^1 M(t)dt$ は収束するので、 $x_0 \leq x$ で上の積分 $\int_{-\infty}^1 f_n(x,t) \ dt \ \mathrm{t}$ 一様収束する。

次に、
$$(P. 115) \frac{\log t}{t} \rightarrow 0 \ (t \rightarrow +0)$$
 だから、 $\log t = O(t) \ (t \rightarrow +\infty)$ である。

任意のmに対し

$$\frac{e^{-t}}{t^{-m}} = \frac{t^m}{e^t} \rightarrow 0 \ (t \rightarrow +\infty) \ (P. \ 115)$$
、 $e^{-t} = O(t^{-m}) \ (t \rightarrow +\infty)$ と合わせて

$$\begin{aligned} & \frac{f_n(x,t)}{t^{x+n-1-m}} = \frac{e^{-t}t^{x-1}(\log t)^n}{t^{x+n-1-m}} = \frac{e^{-t}(\log t)^n}{t^{n-m}} \\ & = \frac{e^{-t}}{t^{-m}} \times (\frac{\log t}{t})^n \to 0 \ (t \to +\infty) \end{aligned}$$

 $f_n(x,t)$ = $O(t^{x+n-1-m})$ $(t\to +\infty)$ を得るから、m を十分に大きくすれば、 x+n-1-m < -1 として、定理11.3、1) より、

$$\int_{1}^{+\infty} f_{n}(x,t) dt$$

が絶対収束することがわかる。 さらに $x_1 > 0$ を固定したとき、 $x \le x_1$, $1 \le t$ で、

$$|f_n(x,t)| = |e^{-t}t^{x-1}(\log t)^n| \le |e^{-t}t^{x_1-1}(\log t)^n| = |f_n(x_1,t)|$$

だから、この積分は $x \leq x$, で一様収束する。 $(|f_n(x_1,t)| = M(t)$ とする)

ここで、 $0 < x_0$, x_1 は任意だったので、 x_0 = x_1 としてもよい。よって、広義積分(15

.2) の右辺が任意のnに対してI上一様収束することがわかった。

したがって、定理14.4により、 $\Gamma(x)$ は x>0 で何回でも微分可能で、n 階導関数は(15.2)で与えられることが n に関する帰納法で証明される。特に、 $\Gamma(x)$ は x>0 で連続である。

(P. 329 定理15. 2の証明)

$$f(x+n) = f(x+n-1+1) = (x+n-1)f(x+n-1)$$

$$= (x+n-1)f(x+n-2+1)$$

=
$$(x+n-1)(x+n-2)f(x+n-2)$$

=
$$(x+n-1)(x+n-2)(x+n-3) \cdot \cdot \cdot (x+1) x f(x) \cdot \cdot \cdot (15.4)$$

$$g(x)$$
 = $\log f(x)$ とし、 $0 < x < 1$, $2 \le n \in N$ とする。

 $\log f(x)$ は凸関数なので、定理2.13、b) より、0 < a < t < b に対して、

$$\frac{g(t)-g(a)}{t-a} \leq \frac{g(b)-g(a)}{b-a} \leq \frac{g(b)-g(t)}{b-t} \cdots (15.6)$$

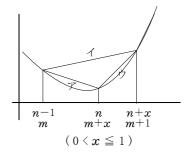
区間を(n-1, n, n+x)に適用すると

すると、上の(15.6)の(イ)から

$$\frac{g(n)-g(n-1)}{n-(n-1)} \le \frac{g(n+x)-g(n)}{(n+x)-n}$$

$$\frac{\log f(n) - \log f(n-1)}{n - (n-1)}$$

$$\leq \frac{\log f(n+x) - \log f(n)}{(n+x) - n}$$



ここで、f(n+1) = n! (15.5) なので、

$$\log f(n) - \log f(n-1) = \log 1 + \log 2 + \dots + \log (n-1) - (\log 1 + \log 2 + \dots + \log (n-1)) - (\log 1 + \log 2 + \dots + \log (n-1))$$

よって、
$$log(n-1) \le \frac{log f(n+x) - log f(n)}{x}$$
 ($n \ge 2$) …①

次に、(m, m + x, m + 1) 区間に(15.6)の(ア)から

$$\frac{g(m+x) - g(m)}{(m+x) - m} \le \frac{g(m+1) - g(m)}{(m+1) - m} = \frac{\log f(m+1) - \log f(m)}{1}$$

$$\frac{\log f(m+x) - \log f(m)}{x} \le \log m \ (m \ge 2) \cdots 2$$

①はx=1で成り立つ。また、(15.6)の(ア)はt=b(x=1)でも成り立つので

①、②はx=1で成り立つ。

①にxをかけたものにおける指数関数 exp の値を考えて得られる不等式に f(n) をかければ、

$$xlog(n-1) \leq log \frac{f(n+x)}{f(n)} \rightarrow (n-1)^x \leq \frac{f(n+x)}{f(n)}$$
 となって

①
$$(x \cdot (n-1)^x f(n) \le f(n+x) \quad (0 < x \le 1) \ (n \ge 2)$$

同様にして
$$\log \frac{f(m+x)}{f(m)} \le x log(m)$$
 なので

②
$$t t$$
, $f(m+x) \leq m^x f(m)$ $(0 < x \leq 1) (m \geq 2)$

ここで、(15.4)を用い、x(x+1) … (x+n-1) または、x(x+1) … (x+m-1) で割れば

(1)
$$l_{x}^{2}$$
, $(n-1)^{x} f(n) \leq (x+n-1) \cdots (x+1) x f(x)$

$$\frac{(n-1)^x f(n)}{x(x+1)\cdots(x+n-1)} \le f(x)$$

ここで、 $n \ge 2$ は任意だから、n-1 を p に置き換えてもよい。そして、(15.5) を用いると、n-1=p として

①lt,
$$\frac{p!p^x}{x(x+1)\cdots(x+p)} \le f(x)$$
 (0 < $x \le 1$)($p \ge 1$)

②は、
$$f(x) \leq \frac{m^x f(m)}{x(x+1)\cdots(x+m-1)}$$
 同様に(15.5)を用いると

$$\text{ (2) it, } f(x) \leq \frac{m^x(m-1)!}{x(x+1)\cdots(x+m-1)} = \frac{m^x m!}{x(x+1)\cdots(x+m-1)(x+m)} \cdot \frac{(x+m)}{m}$$

を得る。以上をまとめると、

①
$$\frac{p!p^x}{x(x+1)\cdots(x+p)} \le f(x) \quad (0 < x \le 1)(p \ge 1)$$

②
$$f(x) \le \frac{m^x m!}{x(x+1)\cdots(x+m-1)(x+m)} \cdot \frac{(x+m)}{m} \quad (0 < x \le 1) (m \ge 2)$$

いままで、p と m は別々にしてきたが、p , m \geq 2 ならば、それぞれの不等式は成り立つので、n \geq 2 として両方とも n に置き換えると

(15.9)
$$\frac{n!n^{x}}{x(x+1)\cdots(x+n)} \le f(x) \le \frac{n^{x}n!}{x(x+1)\cdots(x+n)} \cdot \frac{(x+n)}{n}$$

を得る。この不等式の左辺を $a_n(x)$ とおけば、

$$a_n(x) \le f(x) \le a_n(x) \cdot \frac{(x+n)}{n}$$
 (0 < x \le 1, n \ge 2)

$$0 \le f(x) - a_n(x) \le a_n(x) \left(\frac{x+n}{n} - 1 \right) \le f(x) \frac{x}{n} \to 0 \ (n \to \infty)$$

だから、 $a_n(x) \rightarrow f(x) (n \rightarrow \infty)$ である。 すなわち、

(15.10)
$$f(x) = \lim_{n \to +\infty} \frac{n! n^x}{x(x+1) \cdots (x+n)}$$

を得る。ここで、0 < $x \le 1$ であるが、任意の x > 0 に対しては、x = y + m , 0 < y

 ≤ 1 , $m \in N$ と置けるので、

$$\frac{n!n^x}{x(x+1)\cdots(x+n)} = \frac{n!n^yn^m}{(y+m)(y+m+1)\cdots(y+n+m)}$$
 となり

$$\lim_{n \to +\infty} \frac{n! n^{\boldsymbol{x}} n^{\boldsymbol{m}} y(y+1)(y+2) \cdots (y+m-1)}{y(y+1)(y+2) \cdots (y+n)(\boldsymbol{y}+\boldsymbol{n}+1)(\boldsymbol{y}+\boldsymbol{n}+2) \cdots (\boldsymbol{y}+\boldsymbol{n}+\boldsymbol{m})}$$

=
$$y(y+1)(y+2)\cdots(y+m-1) f(y) = f(y+m) = f(x)$$

となる。ここで、

$$\lim_{n\to\infty}\frac{n^m}{(y+n+1)(y+n+2)\cdots(y+n+m)}$$

$$\lim_{n\to\infty} \, \{\, \frac{n}{(y+n+1)} \times \frac{n}{(y+n+2)} \times \cdots \times \frac{n}{(y+n+m)} \, \} = 1 \ \, を用いた。$$

ところで、 $\Gamma(x)$ も i)、ii)、ii)、ii)をみたすから、 $\Gamma(x)$ についても(15.10) が成り立ち、したがって定理の結論である(15.3) が成り立つ。

(P.330 例1) P.321の例3で触れたように部分積分を使う。

$$B(x,y) = \int_0^1 t^{x-1} (1-t)^{y-1} dt$$

$$B(x+1,y) = \int_0^1 t^x (1-t)^{y-1} dt = \int_0^1 (1-t)^{x+y-1} \frac{1}{(1-t)^x} t^x dt$$

$$= \int_0^1 (1-t)^{x+y-1} (\frac{t}{1-t})^x dt$$

ここで、
$$\int fg' = fg - \int f'g'$$
なので、 $f = (\frac{t}{1-t})^x$, $g' = (1-t)^{x+y-1}$ とすれば

$$g = \int (1-t)^{x+y-1} dt = -\int m^{x+y-1} dm = -\frac{1}{x+y} m^{x+y} = -\frac{(1-t)^{x+y}}{x+y}$$

$$f' = x(\frac{t}{1-t})^{x-1}\frac{1-t-(-t)}{(1-t)^2} = x(\frac{t}{1-t})^{x-1}\frac{1}{(1-t)^2}$$
 this

$$= \left[-\frac{(1-t)^{x+y}}{x+y} \left(\frac{t}{1-t} \right)^x \right]_0^1 - \int_0^1 -\frac{(1-t)^{x+y}}{x+y} x \left(\frac{t}{1-t} \right)^{x-1} \frac{1}{(1-t)^2} dt$$

$$\begin{split} &= \left[-\frac{(1-t)^y}{x+y} \ t^x \right]_0^1 + \frac{x}{x+y} \int_0^1 (1-t)^{x+y} (\frac{t}{1-t})^{x-1} \frac{1}{(1-t)^2} \ dt \\ &= \frac{x}{x+y} \int_0^1 t^{x-1} (1-t)^{x+y-(x-1)-2} dt \\ &= \frac{x}{x+y} \int_0^1 t^{x-1} (1-t)^{y-1} dt = \frac{x}{x+y} \ \mathrm{B}(x,y) \end{split}$$

そこで、y>0を固定したとき

 $f(x) = B(x, y)\Gamma(x+y)$ は定理15. 2の条件 i)、ii)をみたす。なぜなら、

$$f(x+1) = B(x+1, y) \Gamma(x+y+1) = \frac{x}{x+y} B(x,y)(x+y) \Gamma(x+y)$$

= $x B(x,y) \Gamma(x+y) = x f(x)$

を得る。よって条件 i)をみたす。

条件 ii) については、 $log\ f(x) = log\ B(x,y) + log\ \Gamma(x+y)$ なので $log\ \Gamma(x+y)$ が条件 ii) をみたすことは定理15. 1からわかる。残りの $log\ B(x,y)$ については B(x,y) > 0 は定理12. 2,5) と同様にしてわかるので、あとは $log\ B(x,y)$ が x > 0 で凸関数であることを示せばよい。そのための準備として、

 $\int_0^1 t^{x-1}(1-t)^{y-1}(\log t)^n dt$ が x>0, y>0 で広義一様収束することを示す必要がある。(ここでは、y>0 は固定されており、x の関数と考えている。)

$$f_n(x,y,t) = t^{x-1}(1-t)^{y-1}(\log t)^n$$
 $\geq t$ t t ,

$$\frac{f_n(x,y,t)}{(1-t)^{y-n\alpha-1}} = \frac{t^{x-1}(1-t)^{y-1}(\log t)^n}{(1-t)^{y-n\alpha-1}} = \frac{t^{x-1}(\log t)^n}{(1-t)^{-n\alpha}}$$

$$= t^{x-1}((1-t)^{\alpha} \log t)^n \to 0 \ (t \to 1)$$

よって、
$$f_n(x,y,t) = O((1-t)^{y-n\alpha-1})$$
 $(t\to 1)$ となる。

そこで、
$$\forall x > 0$$
 に対し、 $0 < \alpha < \frac{y}{n}$ となるような α をとれば、 $0 < n \alpha < y \rightarrow -n \alpha < 0 < y -n \alpha \rightarrow -1 -n \alpha < -1 < y -n \alpha -1$ よって、 $\beta = y -n \alpha -1$

とすれば、 $\beta > -1$ となるので、 定理11.3、2)から、

$$\int_0^1 f_n(x,y,t)dt$$
 は任意の $x>0$, $y>0$ に対し絶対収束する。

ここで、任意に $x_0 > 0$ を固定し、 $x \ge x_0$, $0 \le t < 1$ ならば、 $-1 \le t - 1 < 0 \to 1$ $\ge 1 - t > 0$ となり、 $y = a^x (0 < a \le 1)$ は単調減少関数なので $|f_n(x,y,t)| = |t^{x-1}(1-t)^{y-1}(\log t)^n| \le |t^{x_0-1}(1-t)^{y-1}(\log t)^n|$ だから、

 $\mid t^{x_0-1}(1-t)^{y-1}(\log t)^n\mid$ = M(t) として、 $\int_0^1 M(t)dt$ は上の結果から収束する。 よって、定理14. 2から、 $x\geq x_0$ で一様収束する。

つまり、 $I=\{x\mid x\in R, x>0\}$ とすれば I に含まれる任意の有界閉区間 $J=[x_1,x_2]$ をとれば、 $x\geq x_1$ で一様収束するので、上の積分は x>0 で**広義**一

様収束することがわかる。定理15.1と同様にnに関する帰納法で

$$g(x) = \int_0^1 t^{x-1} (1-t)^{y-1} dt$$
 $g'(x) = \int_0^1 t^{x-1} (1-t)^{y-1} (\log t) dt$: $g^{(n)}(x) = \int_0^1 t^{x-1} (1-t)^{y-1} (\log t)^n dt$ $g^{(n+1)}(x) = \int_0^1 t^{x-1} (1-t)^{y-1} (\log t)^{n+1} dt$ を得る。また、任意の $u \in R$ に対し $g(x)u^2 + 2g'(x)u + g''(x)$ $= \int_0^1 t^{x-1} (1-t)^{y-1} (u^2 + 2u\log t + (\log t)^2) dt$ $= \int_0^1 t^{x-1} (1-t)^{y-1} (u + \log t)^2 dt \ge 0$ この二次式の判別式 D は $\frac{D}{4} = g'(x)^2 - g(x)g''(x) \le 0$ となり $(\log g(x))' = \frac{g'(x)}{g(x)}$ $\to (\log g(x))'' = (\frac{g'(x)}{g(x)})' = \frac{g(x)g''(x) - g'(x)^2}{g(x)} \ge 0$

となって、log g(x) が凸関数であることがわかる。そこで、定理15. 2 系1により

$$f(x) = f(1) \Gamma(x)$$

となる。

(P. 331 定理15.2系2)

 $0 < x+m = y \ge 1$

$$\frac{n!n^x}{x(x+1)\cdots(x+n)} = \frac{n!n^y}{n^m(y-m)(y-m+1)\cdots(y-m+n)}$$

は (y-m) から (y+n) までの m+n+1 個の因子すべての積である。 わかりにくいが実際に m=3, n=5 としてやってみると

$$(y-3)(y-2)(y-1)y(y+1)(y+2)\times (y+3)(y+4)(y+5)$$

となり、9個の因子の積になっている。

$$= \frac{n!n^y(\mathbf{y} - \mathbf{m} + \mathbf{n} + 1) \cdots (\mathbf{y} + \mathbf{n})}{n^m(\mathbf{y} - \mathbf{m})(\mathbf{y} - \mathbf{m} + 1) \cdots (\mathbf{y} - \mathbf{m} + \mathbf{n}) \times (\mathbf{y} - \mathbf{m} + \mathbf{n} + 1) \cdots (\mathbf{y} + \mathbf{n})}$$

$$=\frac{1}{(y-m)(y-m+1)\cdots(y-m+n)(y-m+n+1)\cdots(y-1)}\times\frac{n!n^y}{y(y+1)\cdots(y+n)}$$

$$\times \frac{(y-m+n+1)\cdots(y+n)}{n^m}$$

第三の因子は分子が m 個の因子の積なので

$$\frac{(y-m+n+1)\cdots(y+n)}{n^m} = (1+\frac{y-m+1}{n})\cdots(1+\frac{y}{n}) \to 1 \ (n\to +\infty)$$

第二の因子はy>0なので $\Gamma(y)$ に収束する。

$$(5.13) \lim_{n \to +\infty} \frac{n! n^x}{x(x+1) \cdots (x+n)} = \frac{\Gamma(y)}{(y-m)(y-m+1) \cdots (y-1)}$$

y = x + m を代入すると

$$= \frac{\Gamma(x+m)}{x(x+1)\cdots(x+m-1)}$$

となる。m は適当だったので、m+1 としてみると

$$\lim_{n \to +\infty} \frac{n! n^x}{x(x+1) \cdots (x+n)} = \frac{\Gamma(x+m+1)}{x(x+1) \cdots (x+m)} = \frac{(x+m) \Gamma(x+m)}{x(x+1) \cdots (x+m)}$$

$$= \frac{\Gamma(x+m)}{x(x+1) \cdots (x+m)} = \frac{\Gamma(x+m) \Gamma(x+m)}{x(x+1) \cdots (x+m)} = \frac{\Gamma(x+m)}{x(x+1) \cdots (x$$

$$=\frac{1(x+m)}{x(x+1)\cdots(x+m-1)}$$

となり等しいことがわかる。 また、x が 0 または負の整数の場合、分母の x(x+1) … (x+n) のいずれかが 0 となってしまうので定義域からはずす必要がある。

(P. 333 Weierstrassの公式)

 $C = \lim_{n \to \infty} (1 + \frac{1}{2} + \dots + \frac{1}{n} - \log n)$ オイラー定数が収束することはP.370を参照

せよ。任意の $x \in D$ に対し

$$\lim_{n \to \infty} \frac{n! n^x}{x(x+1)(x+2) \cdots (x+n)}$$

$$= \lim_{n \to \infty} \frac{e^{x \log n}}{x(x+1)(x+2) \cdots (x+n) \times \frac{1}{n!}} \leftarrow (\log n^x = x \log n)$$

$$= \lim_{n \to \infty} e^{x(\log n - (1 + \frac{1}{2} + \dots + \frac{1}{n}))} \frac{e^{(x + \frac{1}{2}x + \dots + \frac{x}{n})}}{x(1 + \frac{x}{1})(1 + \frac{x}{2}) \cdots (1 + \frac{x}{n})}$$

$$= \lim_{n \to \infty} e^{x(\log n - (1 + \frac{1}{2} + \dots + \frac{1}{n}))} \frac{e^{\frac{x}{1}} e^{\frac{x}{2}} \dots e^{\frac{x}{n}}}{x(1 + \frac{x}{1})(1 + \frac{x}{2}) \dots (1 + \frac{x}{n})} \cdots \mathcal{F}$$

$$= \frac{e^{-Cx}}{x} \lim_{n \to \infty} \frac{e^{\frac{x}{1}} e^{\frac{x}{2}} \cdots e^{\frac{x}{n}}}{x(1+\frac{x}{1})(1+\frac{x}{2}) \cdots (1+\frac{x}{n})} = \frac{e^{-Cx}}{x} \lim_{n \to \infty} \prod_{k=1}^{n} \frac{e^{\frac{x}{k}}}{(1+\frac{x}{k})}$$

$$= \frac{e^{-Cx}}{x} \prod_{n=1}^{\infty} (1 + \frac{x}{n})^{-1} e^{\frac{x}{n}}$$

第 I 章定理2. 5 , 3) の $\lim_{n\to\infty}\frac{a_n}{b_n}=\frac{a}{b}$ ($b\neq 0$) を使っている。 つまり、ア 全体

を
$$a_n$$
, $b_n = e^{x(\log n - (1 + \frac{1}{2} + \dots + \frac{1}{n}))}$ とし、ともに収束するのでアの右の因子が収束

することがわかる。よって次の等式を得る。

(5.17)
$$\frac{1}{\Gamma(x)} = xe^{Cx} \prod_{n=1}^{\infty} (1 + \frac{x}{n})e^{-\frac{x}{n}}$$

無限積 $\prod_{n=1}^{\infty} (1+\frac{x}{n})e^{-\frac{x}{n}}$ が R で広義一様収束することを示す。

 $(1+\frac{x}{n})e^{-\frac{x}{n}}=1+u_n$ $(u_n$ は連続) とおく、任意に L>0 を決め、 $|x|\leq L$ のとき、n を十分大きく取れば、ある定数 K に関して

$$|u_n| \leq K \frac{|x|^2}{n^2}$$

とすることができることを示す。 そうすれば、 $|u_n| \le K \frac{L^2}{n^2}$ で、 $\sum \frac{1}{n^2}$ は収束し、

P. 390定理6. 4より、無限積が広義一様収束することがわかる。

まず、n>L とし、 $\frac{|x|}{n}<1$ とすることができる。そこで、 $\frac{x}{n}=z$ とおいて $|z|\le 1$ のとき $|\frac{u_n}{z^2}|=|\frac{(1+z)e^{-z}-1}{z^2}|$ が有界であることを示す。そうすれ

ば、その上限を K とすれば証明できる。

さて、 $\frac{(1+z)e^{-z}-1}{z^2}$ であるが、z=0を除き、 $|z|\leq 1$ で連続であることは明らかである。

そこで、z=0 で連続であることがわかれば、有界閉区間で連続な関数は有界であるので K を定めることができる。

まずは準備することとして、

$$b_n = \sum_{k=0}^n \frac{a^k}{n!}$$
 とする。 $\lim_{k \to \infty} b_n = e^a$ (a は任意の実数) である。

$$b_n = 1 + \alpha + \frac{\alpha^2}{2} + \frac{\alpha^3}{3!} + \frac{\alpha^4}{4!} + \dots + \frac{\alpha^n}{n!}$$

$$b_n = 1 + a + \frac{a^2}{2} + a^3(\frac{1}{3!} + \frac{a}{4!} + \dots + \frac{a^{n-3}}{n!})$$

$$b_n = 1 + \alpha + \frac{\alpha^2}{2} + \alpha^3 c_n \cdots$$

ここで、()の中を c_n とすれば、 c_n は $n
ightarrow \infty$ で収束するはずである。特に有界である。

そこで、正数Mがとれて、

$$|c_n| \leq M \quad \cdots \quad 2$$

とすることができる。

(z > 0) の場合 0 < a となる a をとり、 $a \rightarrow +0$ を考える。

$$\mid b_n - 1 - a - \frac{a^2}{2} \mid$$
 = $\mid a^3 c_n \mid$ であり、 $n \to \infty$ のとき、②より、 $\mid e^a - 1 - a - \frac{a^2}{2} \mid$ = $\mid e^a - a - 1 - \frac{a^2}{2} \mid \le a^3 M$

となる。両辺を α^2 で割って、 $\alpha \to +0$ とすれば αM で押さえられるので、

$$\lim_{a \to +0} \frac{e^a - a - 1}{a^2} = \frac{1}{2}$$

となる。よって、

$$\lim_{z \to +0} \frac{(1+z)e^{-z} - 1}{z^2} = \lim_{z \to +0} -\frac{1}{e^z} \times \frac{-(1+z) + e^z}{z^2}$$
$$= \lim_{z \to +0} -\frac{1}{e^z} \times \frac{e^z - z - 1}{z^2} = -\frac{1}{2}$$

(2 < 0) の場合

$$z = -a$$
, $a > 0$ $\geq t$ > 5 .

$$(1+z)e^{-z}-1=(1-a)e^{a}-1=e^{a}-ae^{a}-1$$

②を利用する。

$$\begin{split} &| \ b_n - ab_n - 1 + \frac{1}{2}a^2 \ | \\ &= | \ 1 + a + \frac{a^2}{2} + a^3c_n - a(1 + a + \frac{a^2}{2} + a^3c_n) - 1 + \frac{1}{2}a^2 \ | \\ &= | \ 1 + a + \frac{a^2}{2} + a^3c_n - a - a^2 - \frac{a^3}{2} - a^4c_n - 1 + \frac{1}{2}a^2 \ | \end{split}$$

$$= |a^{3}(c_{n} - \frac{1}{2} - ac_{n})| \le a^{3}|c_{n} - \frac{1}{2}| + a^{4}|c_{n}|$$

 $n \to \infty$ のとき、②より、

$$\mid e^{a} - ae^{a} - 1 + \frac{1}{2}a^{2} \mid \leq a^{3} \mid M - \frac{1}{2} \mid + a^{4}M$$

となる。両辺を a^2 で割って、 $a \to +0$ とすれば、 $a \mid M - \frac{1}{2} \mid + a^2 M$ で押さえることができるので

$$\lim_{a \to +0} \frac{e^a - ae^a - 1}{a^2} = -\frac{1}{2}$$

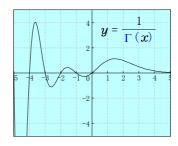
$$\lim_{z \to -0} \frac{(1+z)e^{-z} - 1}{z^2} = \lim_{z \to -0} \frac{e^{-z} + ze^{-z} - 1}{z^2} = \lim_{a \to +0} \frac{e^a - ae^a - 1}{a^2} = -\frac{1}{2}$$

よって、z=0 で連続になることがわかった。L は任意だったので、任意の有界閉区間を含ませることができるので広義一様収束することがわかる。よって、P.390 定理6.4とP.308の定理13.3系2を参考にして $\prod_{n=1}^{\infty} (1+\frac{x}{n})e^{-\frac{x}{n}}$ が R 上で連続であることがわかった。

(5.17) の右辺は任意の $x \in R$ で収束する。よって、 $x = -m \in (-N)$ に対し n = m のとき $(1 + \frac{(-m)}{n}) = 0$ となることが一度だけあるが、P.389の定理6.1か

ら0となる因子を除いた無限積は収束するので、値は0となる。

(15.16) から、 $\frac{1}{\Gamma(x)}$ は x = -n で 0 として R 全体に拡張し、また、R で連続であったので、(5.17) が任意の $x \in R$ で成り立つことがわかった。



(P. 333 定理15. 3系2)

0 < x + m = y とおくとき条件 i)から

$$f(x+m-1+1) = (x+m-1)f(x+m-1)$$

$$= (x+m-1)(x+m-2)f(x+m-2)$$

=
$$(x+m-1)(x+m-2)(x+m-3)f(x+m-3)$$

= $(y-1)(y-2)\cdots(y-m)f(x)$

つまり

$$f(x) = \frac{f(y)}{(y-1)(y-2)\cdots(y-m)} = \frac{f(1) \Gamma(y)}{(y-1)(y-2)\cdots(y-m)}$$

$$\Gamma(\mathbf{y}) = \Gamma(\mathbf{x} + \mathbf{m}) = (\mathbf{x} + \mathbf{m} - 1) \cdots (\mathbf{x} + 1)\mathbf{x} \ \Gamma(\mathbf{x}) = (\mathbf{y} - 1)(\mathbf{y} - 2) \cdots (\mathbf{y} - \mathbf{m} \ \Gamma(\mathbf{x}))$$

$$=\frac{f(1)(y-1)(y-2)\cdots(y-m)\Gamma(x)}{(y-1)(y-2)\cdots(y-m)}=f(1)\Gamma(x)$$

(P. 334 定理15.5(相補公式))

(周期性) $\Gamma(1-x)$ の関係から、D = R - (-N) が R - Z になったことに注意したい。また、 $\sin \pi(x+1) = \sin \pi x \cos \pi + \cos \pi x \sin \pi = -\sin \pi x$ であり

$$x$$
 を $x+1$ に置き換えると、 $\Gamma(1-x)=(-x)\Gamma(-x)$ なので

$$\phi\left(x+1\right) = \Gamma\left(x+1\right)\Gamma\left(-x\right)\sin\pi\left(x+1\right) = x\Gamma\left(x\right)\frac{\Gamma\left(1-x\right)}{-x}\left(-\sin\pi x\right) = \phi\left(x\right)$$

しかし、 $\phi(x+1) = \phi(x)$ なので周期が 1 と考えるのは軽率であり、**周期に 1** をもつと考えた方がよい。証明の後半でその点はすっきりする。

参考までに、 $\Gamma(x)$ は周期関数ではない。もし、周期 a>0 をもつならば、任意の $x\in R-(-N)$ に対して、

$$\Gamma(x + a) = \Gamma(x) \cdots (1)$$

$$x$$
 は任意であるので $x=1$ とすると、 $\Gamma(1+\alpha)=\Gamma(1)=1$

$$x = 2$$
 $\geq 1! = 1$

ところが、定理15.3より、任意の $x \in R-(-N)$ に対して

$$\Gamma(x + 1) = x \Gamma(x) \cdots (2)$$

なので、
$$\Gamma(2+a)$$
 = $\Gamma(1+a+1)$ = $(1+a)$ $\Gamma(1+a)$ = $1+a$ となる。

よって、1=1+aとなり、a=0となって矛盾する。

 $(C^{\infty} \otimes A)$ $\phi(x)$ が $x \in R$ で C^{∞} 級であることを示す。

(15. 20) なり

$$\phi(x) = \Gamma(x) \Gamma(1-x) \sin \pi x = \Gamma(x+1) \Gamma(1-x) \frac{\sin \pi x}{x}$$
$$= \Gamma(1+x) \Gamma(1-x) (\pi - \frac{\pi^{3}x^{2}}{3!} + \frac{\pi^{5}x^{4}}{5!} - \cdots)$$

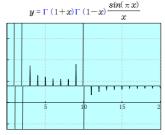
-1 < x < 1 ならば 1-x > 0 , 1+x > 0 なので、 $\Gamma(1+x)\Gamma(1-x)$ は C^{∞} 級 、 $(\pi - \frac{\pi^3 x^2}{3!} + \cdots)$ も C^{∞} 級 により、-1 < x < 1 で $\phi(x)$ は C^{∞} 級となる。

 ϕ は R-Z で定義されていたが、 $x \to \pm 0$

のとき、
$$\lim_{x\to\pm0} \phi(x) = \pi$$
となる。そこで、周期性から任意の $n\in Z$ に対し、 $\lim_{x\to\pm0} \phi(x) = \pi$

よって、 $\phi(0) = \phi(n) = \pi (n \in \mathbb{Z})$ と定義すれば ϕ は R で連続になる。また、|x| < 1 で

 C^{∞} 級なので R 全体で C^{∞} 級となる。



(不連続点処理をしていない。)

((15.21)の式変形)

$$\sin\frac{\pi(x+1)}{2} = \sin\left(\frac{\pi x}{2} + \frac{\pi}{2}\right) = \sin\frac{\pi x}{2}\cos\frac{\pi}{2} + \cos\frac{\pi x}{2}\sin\frac{\pi}{2}$$

$$= \cos\frac{\pi x}{2}$$

なので、 $R-Z \in D$ で $\frac{1}{2}$ の公式(定理15.4)から

$$\phi\left(\frac{x}{2}\right)\phi\left(\frac{x+1}{2}\right)$$

$$= \Gamma(\frac{x}{2}) \Gamma(\frac{2}{2} - \frac{x}{2}) \sin \frac{\pi x}{2} \Gamma(\frac{x+1}{2}) \Gamma(\frac{2}{2} - \frac{x+1}{2}) \sin \frac{\pi (x+1)}{2}$$

$$= \Gamma(\frac{x}{2})\Gamma(\frac{2-x}{2}) \Gamma(\frac{x+1}{2})\Gamma(\frac{1-x}{2}) \sin \frac{\pi x}{2} \cos \frac{\pi x}{2}$$

$$=\frac{1}{2}\sin \pi x \Gamma(\frac{x}{2})\Gamma(\frac{-x+2}{2})\Gamma(\frac{x+1}{2})\Gamma(\frac{-x+1}{2})$$

$$=\frac{1}{2}sin \pi x \Gamma(\frac{x}{2})\Gamma(\frac{x+1}{2})\Gamma(\frac{-x+1}{2})\Gamma(\frac{-x+2}{2})$$

$$=\frac{1}{2}sin \pi x \cdot 2^{1-x}\sqrt{\pi} \Gamma(x) \cdot 2^{1+x-1}\sqrt{\pi} \Gamma(-x+1)$$

$$=\frac{1}{2}\cdot 2^{1-x}\cdot 2^x \pi \sin \pi x \cdot \Gamma(x)\Gamma(1-x) = \pi \phi(x)$$

((15.22)の証明)

$$\pi \phi(x) = \phi(\frac{x}{2})\phi(\frac{x+1}{2})$$

$$\log \pi + \log \phi(x) = \log \phi(\frac{x}{2}) + \log \phi(\frac{x+1}{2})$$

両辺を微分して

$$(\log \phi(x))' = \frac{1}{2} - \frac{\phi'(\frac{x}{2})}{\phi(\frac{x}{2})} + \frac{1}{2} - \frac{\phi'(\frac{x+1}{2})}{\phi(\frac{x+1}{2})}$$

$$g(x) = (log \phi(x))$$
"

$$=\frac{1}{4} \frac{\phi''(\frac{x}{2})\phi(\frac{x}{2})-\phi'(\frac{x}{2})^2}{\phi(\frac{x}{2})^2} + \frac{1}{4} \frac{\phi''(\frac{x+1}{2})\phi(\frac{x+1}{2})-\phi'(\frac{x+1}{2})^2}{\phi(\frac{x+1}{2})^2}$$

$$=\frac{\phi\,(\frac{x+1}{2})^2\left\{\,\phi\,"(\frac{x}{2})\,\phi\,(\frac{x}{2})-\,\phi\,"(\frac{x}{2})^2\right\}}{4(\pi\,\phi\,(x))^2}+\frac{\phi\,(\frac{x}{2})^2\left\{\,\phi\,"(\frac{x+1}{2})\,\phi\,(\frac{x+1}{2})-\,\phi\,"(\frac{x+1}{2})^2\right\}}{4(\pi\,\phi\,(x))^2}$$

$$= \frac{1}{4 \pi^2 \phi(x)^2} \left\{ \phi(\frac{x+1}{2})^2 \phi''(\frac{x}{2}) \phi(\frac{x}{2}) - \phi(\frac{x+1}{2})^2 \phi'(\frac{x}{2})^2 \right.$$

$$+ \ \phi \, (\frac{\pmb{x}}{\pmb{2}})^{\pmb{2}} \, \phi \, "(\frac{\pmb{x}\!+\!1}{2}) \, \phi \, (\frac{\pmb{x}\!+\!1}{\pmb{2}}) - \phi \, (\frac{\pmb{x}}{2})^2 \, \phi \, "(\frac{\pmb{x}\!+\!1}{2})^2 \,)$$

$$= \frac{1}{4 \pi^2 \phi(x)^2} \left\{ \pi \phi(x) \phi(\frac{x+1}{2}) \phi''(\frac{x}{2}) - \phi(\frac{x+1}{2})^2 \phi'(\frac{x}{2})^2 \right\}$$

+
$$\pi \phi(x) \phi(\frac{x}{2}) \phi''(\frac{x+1}{2}) - \phi(\frac{x}{2})^2 \phi'(\frac{x+1}{2})^2$$

$$= \frac{1}{4 \pi^2 \phi(x)^2} \left\{ \pi \phi(x) \left\{ \phi(\frac{x+1}{2}) \phi''(\frac{x}{2}) + \phi(\frac{x}{2}) \phi''(\frac{x+1}{2}) \right\} - \left\{ \phi(\frac{x+1}{2})^2 \phi'(\frac{x}{2})^2 + \phi(\frac{x}{2}) \phi''(\frac{x+1}{2}) \right\} - \left\{ \phi(\frac{x+1}{2})^2 \phi'(\frac{x}{2})^2 + \phi(\frac{x}{2}) \phi''(\frac{x+1}{2}) \right\} - \left\{ \phi(\frac{x+1}{2})^2 \phi'(\frac{x}{2}) + \phi(\frac{x}{2}) \phi''(\frac{x+1}{2}) \right\} - \left\{ \phi(\frac{x+1}{2})^2 \phi'(\frac{x+1}{2}) + \phi(\frac{x}{2}) \phi''(\frac{x+1}{2}) \right\} - \left\{ \phi(\frac{x+1}{2})^2 \phi'(\frac{x+1}{2}) + \phi(\frac{x}{2}) \phi''(\frac{x+1}{2}) + \phi(\frac{x}{2}) + \phi(\frac{x}{2})$$

$$+ \phi(\frac{x}{2})^2 \phi'(\frac{x+1}{2})^2 \}$$

$$= \frac{1}{4\pi^{2}\phi(x)^{2}} \left(\pi \phi(x) \left\{ \phi(\frac{x+1}{2}) \phi''(\frac{x}{2}) + \phi(\frac{x}{2}) \phi''(\frac{x+1}{2}) \right\} - \left\{ \phi(\frac{x+1}{2}) \phi'(\frac{x}{2}) \right\} \right)$$

$$\hspace*{35pt} + \phi(\frac{x}{2})\phi'(\frac{x+1}{2}) \ \}^{2} + 2\phi(\frac{x+1}{2}) \ \phi'(\frac{x}{2})\phi(\frac{x}{2})\phi'(\frac{x+1}{2}))$$

$$\text{ZZTC, } (\phi(\frac{x+1}{2})\phi(\frac{x}{2}))\text{'} = \frac{1}{2}\phi'(\frac{x+1}{2})\phi(\frac{x}{2}) + \frac{1}{2}\phi(\frac{x+1}{2})\phi'(\frac{x}{2}) \text{ for } \text{.}$$

$$(\pi \phi(\mathbf{x}))' = \frac{1}{2} \phi'(\frac{x+1}{2}) \phi(\frac{x}{2}) + \frac{1}{2} \phi(\frac{x+1}{2}) \phi'(\frac{x}{2})$$

$$2\pi \phi'(\mathbf{x}) = \phi'(\frac{x+1}{2}) \phi(\frac{x}{2}) + \phi(\frac{x+1}{2}) \phi'(\frac{x}{2}) \cdots$$

$$\pi \phi''(\mathbf{x}) = \frac{1}{4} \phi''(\frac{x+1}{2}) \phi(\frac{x}{2}) + \frac{1}{4} \phi'(\frac{x+1}{2}) \phi'(\frac{x}{2}) + \frac{1}{4} \phi'(\frac{x+1}{2}) \phi'(\frac{x}{2})$$

$$+ \frac{1}{4} \phi(\frac{x+1}{2}) \phi''(\frac{x}{2})$$

$$= \frac{1}{4} \{ \phi''(\frac{x+1}{2}) \phi(\frac{x}{2}) + 2 \phi'(\frac{x+1}{2}) \phi'(\frac{x}{2}) + \phi(\frac{x+1}{2}) \phi''(\frac{x}{2}) \} \cdots @$$

$$\frac{1}{4} \frac{1}{4} \frac{1}{2} \frac{1}{$$

①,②を代入して

$$= \frac{\pi \phi(x) \cdot 4 \pi \phi''(x) - (2 \pi \phi'(x))^{2}}{4 \pi^{2} \phi(x)^{2}}$$

$$=\frac{4\,\pi^{\,2}\,\phi\,(x)\,\phi\,"(x)\,-\,4\,\pi^{\,2}\,\phi\,'(x)^{2}}{4\,\pi^{\,2}\,\phi\,(x)^{2}}=\frac{\phi\,(x)\,\phi\,"(x)\,-\,\phi\,'(x)^{2}}{\phi\,(x)^{2}}$$

以上により
$$g(x) = \frac{\phi(x)\phi''(x) - \phi'(x)^2}{\phi(x)^2}$$
 となる。

次に、(15.22) を証明する。

$$g(\frac{x}{2}) + g(\frac{x+1}{2})$$

$$= \frac{\phi(\frac{x}{2})\phi''(\frac{x}{2}) - \phi'(\frac{x}{2})^2}{\phi(\frac{x}{2})^2} + \frac{\phi(\frac{x+1}{2})\phi''(\frac{x+1}{2}) - \phi'(\frac{x+1}{2})^2}{\phi(\frac{x+1}{2})^2}$$

$$\begin{split} &= \frac{1}{\phi\left(\frac{x}{2}\right)^{2}\phi\left(\frac{x+1}{2}\right)^{2}} \left\{ \phi\left(\frac{x+1}{2}\right)^{2}\phi\left(\frac{x}{2}\right)\phi''(\frac{x}{2}) - \phi\left(\frac{x+1}{2}\right)^{2}\phi'(\frac{x}{2})^{2} \right. \\ &+ \phi\left(\frac{x}{2}\right)^{2}\phi\left(\frac{x+1}{2}\right)\phi''(\frac{x+1}{2}) - \phi\left(\frac{x}{2}\right)^{2}\phi'(\frac{x+1}{2})^{2} \right\} \\ &= \frac{1}{\pi^{2}\phi\left(x\right)^{2}} \left\{ \pi\phi\left(x\right)\phi\left(\frac{x+1}{2}\right)\phi''(\frac{x}{2}) - \phi\left(\frac{x+1}{2}\right)^{2}\phi'(\frac{x}{2})^{2} \right. \\ &+ \pi\phi\left(x\right)\phi\left(\frac{x}{2}\right)\phi''(\frac{x+1}{2}) - \phi\left(\frac{x}{2}\right)^{2}\phi'(\frac{x+1}{2})^{2} \right\} \\ &= \frac{1}{\pi^{2}\phi\left(x\right)^{2}} \left\{ \pi\phi\left(x\right)\phi\left(\frac{x+1}{2}\right)\phi''(\frac{x}{2}) + \pi\phi\left(x\right)\phi\left(\frac{x}{2}\right)\phi''(\frac{x+1}{2}) \right. \\ &- \left. \left(\phi\left(\frac{x+1}{2}\right)^{2}\phi'(\frac{x}{2}\right)^{2} + \phi\left(\frac{x}{2}\right)^{2}\phi'(\frac{x+1}{2}\right)^{2} \right) \right\} \\ &= \frac{1}{\pi^{2}\phi\left(x\right)^{2}} \left\{ \pi\phi\left(x\right) \left\{ \phi\left(\frac{x+1}{2}\right)\phi''(\frac{x}{2}) + \phi\left(\frac{x}{2}\right)\phi''(\frac{x+1}{2}\right) \right\} - \left\{ \phi\left(\frac{x+1}{2}\right)\phi'\left(\frac{x}{2}\right) + \phi\left(\frac{x}{2}\right)\phi''(\frac{x+1}{2}\right) \right\} \\ &+ \phi\left(\frac{x}{2}\right)\phi'\left(\frac{x+1}{2}\right) \right\}^{2} + 2\phi\left(\frac{x+1}{2}\right)\phi'\left(\frac{x}{2}\right)\phi'\left(\frac{x}{2}\right)\phi'\left(\frac{x+1}{2}\right) \right\} \end{split}$$

(1), (2) Ly

$$= \frac{1}{\pi^{2} \phi(x)^{2}} \{\pi \phi(x) \{\phi(\frac{x+1}{2}) \phi''(\frac{x}{2}) + \phi(\frac{x}{2}) \phi''(\frac{x+1}{2}) \} - \{2\pi \phi'(x)\}^{2}$$

$$+ 2\phi(\frac{x+1}{2}) \phi'(\frac{x}{2}) \phi'(\frac{x}{2}) \phi'(\frac{x+1}{2}) \}$$

$$= \frac{1}{\pi^{2} \phi(x)^{2}} \{\pi \phi(x) \{\phi(\frac{x+1}{2}) \phi''(\frac{x}{2}) + \phi(\frac{x}{2}) \phi''(\frac{x+1}{2}) + 2\phi'(\frac{x}{2}) \phi'(\frac{x+1}{2}) \}$$

$$- \{2\pi \phi'(x)\}^{2} \}$$

$$= \frac{\pi \phi(x) \cdot 4\pi \phi''(x) - 4\pi^{2} \phi'(x)^{2}}{\pi^{2} + (x)^{2}} = 4\frac{\phi(x) \phi''(x) - \phi'(x)^{2}}{\pi^{2} + (x)^{2}} = 4g(x)$$

また、g(x) は $\phi(x)$, $\phi(x)$, $\phi(x)$ "の関数なので、 $\phi(x)$, $\phi(x)$ "の周期性さえわかればよい、それは微分の定義から容易にわかる。

$$\phi'(x+1) = \lim_{h \to 0} \frac{\phi(x+1+h) - \phi(x+1)}{h} = \lim_{h \to 0} \frac{\phi(x+h) - \phi(x)}{h} = \phi'(x)$$

 ϕ "(x) についても同様である。よって、g(x) は周期 1 をもつ周期関数である。

注意1 (15.23) は
$$\frac{1}{\Gamma(x)} = 0$$
 ($x = -n$) $\rightarrow \frac{1}{\Gamma(x)} \cdot \frac{1}{\Gamma(1-x)} = 0$

(P. 336 (15.24))

$$\frac{\pi}{-x \Gamma(x) \Gamma(-x)} = -\frac{\pi}{x} \cdot \{ xe^{Cx} \prod_{n=1}^{\infty} (1 + \frac{x}{n}) e^{-\frac{x}{n}} \cdot (-xe^{-Cx} \prod_{n=1}^{\infty} (1 - \frac{x}{n}) e^{\frac{x}{n}}) \}$$

(P. 336 定理15.6 系,2))

$$\begin{split} &\prod_{n=1}^{m} \frac{2^{2} n^{2}}{(2n-1)(2n+1)} = \frac{2^{2} \times 1}{1 \times 3} \times \frac{2^{2} \times 2^{2}}{3 \times 5} \times \frac{2^{2} \times 3^{2}}{5 \times 7} \times \cdots \times \frac{2^{2} m^{2}}{(2m-1)(2m+1)} \\ &= \frac{2^{2m} (m!)^{2}}{(2m-1)!! \ (2m+1)!!} = \frac{(2^{m} m!)^{2}}{(2m-1)!! \ (2m-1)!! \ (2m+1)} = \frac{(2m)!!}{(2m-1)!!} \frac{1}{2m+1} \end{split}$$

両辺を2倍して平方根を取ると

$$\begin{split} & \sqrt{\pi} = \lim_{n \to \infty} \frac{(2n)!!}{(2n-1)!!} \sqrt{\frac{2}{2n+1}} = \lim_{n \to \infty} \frac{(2n)!!}{(2n-1)!!} \sqrt{\frac{2}{2n+1}} \\ & = \lim_{n \to \infty} \frac{(2n)!!}{(2n-1)!!} \sqrt{\frac{2n}{2n+1}} = \lim_{n \to \infty} \frac{(2n)!!}{(2n-1)!!} \sqrt{\frac{2n}{2n+1}} \to 1 \,) \end{split}$$

第 I 章定理2.5,3)を使った。

(P. 338, (15.26))

$$\frac{f(x+1)}{f(x)} = \frac{(x+1)^{x+\frac{1}{2}}e^{-x-1}e^{\mu(x+1)}}{x^{x-\frac{1}{2}}e^{-x}e^{\mu(x)}}$$

$$= \frac{x(x+1)^{x+\frac{1}{2}}}{x^{x}} = \frac{x(x+1)^{x+\frac{1}{2}}}{x^{x+\frac{1}{2}}} = x(1+\frac{1}{x})^{x+\frac{1}{2}} \xrightarrow{f(x+1)} f(x) = x(1+\frac{1}{x})^{x+\frac{1}{2}}e^{-x-1+x}e^{\mu(x+1)-\mu(x)}$$

$$= x(1+\frac{1}{x})^{x+\frac{1}{2}}e^{\mu(x+1)-\mu(x)-1}$$

(15.25)の1)をみたすためには f(x+1) = xf(x) となる必要がある。よって

$$\frac{f(x+1)}{f(x)} = x = x(1+\frac{1}{x})^{x+\frac{1}{2}}e^{\mu(x+1)-\mu(x)-1}$$
$$(1+\frac{1}{x})^{x+\frac{1}{2}}e^{\mu(x+1)-\mu(x)-1} = 1$$

$$(x+\frac{1}{2})$$
log $(1+\frac{1}{x})$ + μ $(x+1)$ - μ (x) - 1 = 0 つまり、 $(x+\frac{1}{2})$ log $(1+\frac{1}{x})$ - 1 = μ (x) - μ $(x+1)$ が必要十分条件になる。

(P. 338 (15.27))

$$g(x)=(x+rac{1}{2})log(1+rac{1}{x})-1$$
 $x>0$ で $\mu(x)=\sum\limits_{n=0}^{\infty}g(x+n)$ が収束すれば $\mu(x)$ は定義できる。収束するとすれば $\sum\limits_{n=0}^{\infty}g(x+1+n)$ も収束するので

$$\mu(x) - \mu(x+1) = \sum_{n=0}^{\infty} g(x+n) - \sum_{n=0}^{\infty} g(x+1+n)$$

$$= g(x) + g(x+1) + g(x+2) + \cdots + (g(x+1) + g(x+2) + \cdots)$$

$$= g(x)$$

(P.338 *y*'')

$$\log f(x) = \log(x^{x-\frac{1}{2}}e^{-x}) + \mu(x)$$
 なので $y = \log(x^{x-\frac{1}{2}}e^{-x})$ として、 y " を求める。

準備として、
$$z = x^{x-\frac{1}{2}}$$
 の微分を用意する。

$$\log z = (x - \frac{1}{2})\log x \rightarrow \frac{z'}{z} = \log x + (x - \frac{1}{2}) \times \frac{1}{x}$$

$$z' = x^{x-\frac{1}{2}} (\log x + (x-\frac{1}{2}) \times \frac{1}{x})$$

$$y' = \frac{(x^{x-\frac{1}{2}}e^{-x})'}{x^{x-\frac{1}{2}}e^{-x}} = \frac{z'e^{-x} + x^{x-\frac{1}{2}} \times (-e^{-x})}{x^{x-\frac{1}{2}}e^{-x}}$$

$$= \frac{e^{-x}x^{x^{-\frac{1}{2}}}(\log x + (x^{-\frac{1}{2}}) \times \frac{1}{x}) + x^{x^{-\frac{1}{2}}} \times (-e^{-x})}{x^{x^{-\frac{1}{2}}}e^{-x}}$$

$$= log x + (x - \frac{1}{2}) \times \frac{1}{x} - 1$$

=
$$\log x + 1 - \frac{1}{2}x^{-1} - 1 = \log x - \frac{1}{2}x^{-1}$$

$$y'' = \frac{1}{x} - \frac{1}{2}(-\frac{1}{x^2}) = \frac{1}{x} + \frac{1}{2x^2} > 0 \quad (x > 0)$$

したがって、 $\mu(x)$ が x>0 で凸ならば f は 2)をみたすことになる。

(P.338 (15.29))

$$g(x) = (x + \frac{1}{2}) \log(1 + \frac{1}{x}) - 1$$

$$(\log(1 + \frac{1}{x}))' = \frac{-1x^{-2}}{1 + x^{-1}} = \frac{-1}{x^2 + x} = \frac{-1}{x(x+1)} \text{ for } 7$$

$$g(x)' = \log(1 + \frac{1}{x}) + (x + \frac{1}{2}) \frac{-1}{x(x+1)} = \log(1 + \frac{1}{x}) - \frac{x+0.5}{x(x+1)}$$

$$g(x)'' = \frac{-1}{x(x+1)} - \frac{x^2 + x - (2x+1)(x+0.5)}{x^2(x+1)^2}$$

$$= \frac{-x(x+1) - x^2 - x + 2x^2 + x + x + 0.5}{x^2(x+1)^2} = \frac{0.5}{x^2(x+1)^2} = \frac{1}{2x^2(x+1)^2}$$

(P.338 (15.27)の収束することの証明)

$$y = \frac{1}{2x+1}$$
 とおけば、 $0 < x$ なので $y = \frac{1}{2x+1} < 1$ となる。 そこで、 $1+y = 1+\frac{1}{2x+1} = \frac{2x+2}{2x+1}$, $1-y = 1-\frac{1}{2x+1} = \frac{2x}{2x+1}$ なので
$$\frac{1}{2}log\frac{1+y}{1-y} = \frac{1}{2}log\frac{2x+2}{2x} = \frac{1}{2}log(1+\frac{1}{x})$$
 これを $g(x)$ に代入すると、
$$g(x) = (x+\frac{1}{2})log(1+\frac{1}{x}) - 1 = (2x+1)\frac{1}{2}log(1+\frac{1}{x}) - 1$$

$$= (2x+1)\frac{1}{2}log(\frac{1+y}{1-y}) - 1$$
 ここで、 $(P. 198(4.19)$ より、 $|y| < 1$ なので
$$\frac{1}{2}log(\frac{1+y}{1-y}) = y + \frac{y^3}{3} + \frac{y^5}{5} + \cdots$$
 は収束する整級数であり

$$=(2x+1)(y+\frac{y^3}{3}+\frac{y^5}{5}+\cdots)-1$$

$$=(2x+1)(\frac{1}{(2x+1)}+\frac{1}{3(2x+1)^3}+\frac{1}{5(2x+1)^5}+\cdots)-1$$

$$=\frac{1}{3(2x+1)^2}+\frac{1}{5(2x+1)^4}+\cdots$$

$$=\sum_{n=1}^{\infty}\frac{1}{(2n+1)(2x+1)^{2n}}$$
ここで、 $\mathbf{s}=\sum_{n=1}^{\infty}\frac{1}{a^n}\to a\mathbf{s}=1+\sum_{n=1}^{\infty}\frac{1}{a^n}\to a\mathbf{s}=1+\mathbf{s}\to\mathbf{s}=\frac{1}{a-1}$ なので $0< g(x)<\frac{1}{3}\sum_{n=1}^{\infty}\frac{1}{(2x+1)^{2n}}=\frac{1}{3}\frac{1}{(2x+1)^{2}-1}=\frac{1}{3}\frac{1}{4x^2+4x+1-1}$

$$=\frac{1}{12x(x+1)}=\frac{1}{12x}-\frac{1}{12(x+1)}$$
である。したがって、
$$0<\mu(x)=\sum_{n=0}^{\infty}g(x+n)<\sum_{n=0}^{\infty}\frac{1}{12}(\frac{1}{x+n}-\frac{1}{x+n+1})$$

$$=\frac{1}{12}(\frac{1}{x}-\frac{1}{x+1}+\frac{1}{x+1}-\frac{1}{x+2}-\cdots)=\frac{1}{12x}$$
が5 成り立つ。 そこで
$$(15.30) \quad \mu(x)<\frac{\theta}{12x} \quad (0<\theta<1)$$

と表される。ただし、 θ は x に応じて変化する。

(P. 339 定理15.7(スターリングの公式)の証明)

$$n! = \Gamma(n+1) = af(n+1) = anf(n)$$

$$f(x) = x^{x-\frac{1}{2}}e^{-x}e^{\mu(x)} \not \Leftrightarrow 0 \Leftrightarrow$$

$$n! = anf(n) = an \cdot n^{n-\frac{1}{2}}e^{-n}e^{\mu(n)} = an^{n+\frac{1}{2}}e^{-n}e^{\mu(n)}$$

$$(2n)! = 2anf(2n) = 2an \cdot (2n)^{2n-\frac{1}{2}}e^{-2n}e^{\mu(2n)}$$

$$\frac{(2n)!!}{(2n-1)!!} \frac{1}{\sqrt{n}} = \frac{(2\times4\times6\times\cdots\times2n)\times(2\times4\times6\times\cdots\times2n)}{1\times2\times3\times4\times\cdots\times(2n-1)\times2n\times\sqrt{n}}$$

$$= \frac{(2^{n}(n!))^{2}}{1\times2\times3\times4\times\cdots\times(2n-1)\times2n\times\sqrt{n}} = \frac{2^{2n}(n!)^{2}}{(2n)!!} \frac{1}{\sqrt{n}} \text{ だから}$$

$$\sqrt{\pi} = \lim_{n\to\infty} \frac{2^{2n}(n!)^{2}}{(2n)!\sqrt{n}} = \lim_{n\to\infty} \frac{2^{2n}a^{2}n^{2n+1}e^{-2n}e^{2\mu(n)}}{2an(2n)^{2n-\frac{1}{2}}e^{-2n}e^{\mu(2n)}\sqrt{n}}$$

$$= \lim_{n\to\infty} \frac{2^{2n}an^{2n+1}e^{2\mu(n)}}{2n(2n)^{2n-\frac{1}{2}}e^{\mu(2n)}\sqrt{n}} = \lim_{n\to\infty} \frac{2^{2n}an^{2n+1}e^{2\mu(n)}}{2^{2n+\frac{1}{2}}n^{2n+1}e^{\mu(2n)}}$$

$$= \lim_{n\to\infty} \frac{a}{\sqrt{2}} \times \frac{e^{2\mu(n)}}{e^{\mu(2n)}}$$

$$= \lim_{n\to\infty} \frac{a}{\sqrt{2}} \times \frac{e^{2\mu(n)}}{e^{\mu(2n)}} = \lim_{n\to\infty} \frac{a}{\sqrt{2}} \times e^{\frac{\theta_{1}}{6n} - \frac{\theta_{2}}{24n}} = \lim_{n\to\infty} \frac{a}{\sqrt{2}} \times e^{\frac{4\theta_{1}-\theta_{2}}{24n}} = \frac{a}{\sqrt{2}}$$

$$\cup \text{ The solution}$$

(P. 339 注意2)

定数 a を $\frac{1}{2}$ 公式で求める。

$$f(x) = x^{x - \frac{1}{2}} e^{-x} e^{\mu(x)} , \quad \mu(x) = \frac{\theta}{12x} \quad (0 < \theta < 1)$$

$$\Gamma(x) = af(x) , \quad \Gamma(\frac{x}{2}) \Gamma(\frac{x+1}{2}) = 2^{1-x} \sqrt{\pi} \Gamma(x) \cdots \frac{1}{2} \text{ if}$$

$$af(x) 2^{1-x} \sqrt{\pi} = a^2 f(\frac{x}{2}) f(\frac{x+1}{2})$$

$$f(x) = \frac{a^2 f(\frac{x}{2}) f(\frac{x+1}{2})}{a2^{1-x} \sqrt{\pi}} = \frac{a (\frac{x}{2})^{\frac{x-1}{2}} e^{-\frac{x}{2}} e^{\mu(\frac{x}{2})} (\frac{x+1}{2})^{\frac{x}{2}} e^{\frac{-x-1}{2}} e^{\mu(\frac{x+1}{2})}}{2^{1-x} \sqrt{\pi}}$$

$$= \frac{a 2^{\frac{-x+1}{2}} 2^{-\frac{x}{2}} x^{\frac{x-1}{2}} (x+1)^{\frac{x}{2}} e^{\frac{-2x-1}{2}} e^{\mu(\frac{x+1}{2})} e^{\mu(\frac{x+1}{2})}}{2^{1-x} \sqrt{\pi}}$$

$$= \frac{a}{\sqrt{2\pi}} \sqrt{(1 + \frac{1}{x})^x} e^{\frac{-2x - 1}{2} + \frac{2x}{2}}$$

$$= \frac{a}{\sqrt{2\pi}} \sqrt{(1 + \frac{1}{x})^x} e^{-\frac{1}{2}} \rightarrow 1 \quad (x \rightarrow +\infty)$$

$$\sqrt{(1 + \frac{1}{x})^x} \cdot e^{\frac{-1}{2}} = 1 \quad (x \rightarrow +\infty) \quad (\sqrt{(1 + \frac{1}{x})^x} \rightarrow \sqrt{e} \quad (x \rightarrow +\infty))$$

$$\frac{a}{\sqrt{2\pi}} = 1 \quad (x \rightarrow +\infty) \qquad \Rightarrow \sharp \emptyset, \quad a = \sqrt{2\pi} \quad \xi \uparrow \xi \circlearrowleft_{\circ}$$

第 I 章定理6.6,2)を使っている。

(P. 340 (15. 33))

$$\lim_{x \to \infty} \frac{\Gamma(x)}{\sqrt{2\pi} x^{x - \frac{1}{2}} e^{-x}} = \lim_{x \to \infty} \frac{\sqrt{2\pi} x^{x - \frac{1}{2}} e^{-x} e^{\mu(x)}}{\sqrt{2\pi} x^{x - \frac{1}{2}} e^{-x}} = 1$$

よって、 $\Gamma(x) \sim \sqrt{2\pi} x^{x^{-\frac{1}{2}}} e^{-x} (x \to +\infty)$ (P.115定義2) となる。

$$n! = \Gamma(n+1) = n \Gamma(n)$$
 に対しては

(15.34)
$$n! \sim \sqrt{2\pi} \, n \cdot n^{n-\frac{1}{2}} e^{-n} = \sqrt{2\pi} \, n^{n+\frac{1}{2}} e^{-n} \, (n \to +\infty)$$

(P. 340 例2)

$$(2n)!! = 2n \times (2n-2) \times (2n-4) \times \cdots \times 2$$

=
$$2^{n} \times \{ n \times (n-1) \times (n-2) \times \cdots \times 1 \} = 2^{n} n!$$

$$(2n-1)!! = (2n-1)\times(2n-3)\times(2n-5)\times\cdots\times1$$

$$=\frac{2n\times(2n-1)\times(2n-2)\times\cdots\times2\times1}{2n\times(2n-2)\times(2n-4)\times\cdots\times2}=\frac{(2n)!}{(2n)!!}=\frac{(2n)!}{2^nn!}$$

$$a_n = \frac{(2n)!}{(2^n n!)^2} \cdot \frac{1}{2n+1} \sim \frac{\sqrt{2\pi} (2n)^{2n+\frac{1}{2}} e^{-2n}}{(2^n \sqrt{2\pi} n^{n+\frac{1}{2}} e^{-n})^2} \cdot \frac{1}{2n+1}$$

$$= \frac{\sqrt{2 \pi} (2n)^{2n+\frac{1}{2}} e^{-2n}}{2^{2n} \cdot 2 \pi n^{2n+1} e^{-2n}} \cdot \frac{1}{2n+1} = \frac{\sqrt{2 \pi} 2^{2n+\frac{1}{2}} n^{2n+\frac{1}{2}} e^{-2n}}{2^{2n} \cdot 2 \pi n^{2n+1} e^{-2n}} \cdot \frac{1}{2n+1}$$

$$=\frac{2^{\frac{1}{2}}n^{\frac{1}{2}}}{\sqrt{2\pi}\cdot n^{1}}\cdot \frac{1}{2n+1}=\frac{1}{\sqrt{\pi n}}\cdot \frac{1}{2n+1} (n\rightarrow +\infty)$$

$$\frac{a_{n}}{\frac{1}{2\sqrt{\pi}} \times \frac{1}{n^{\frac{3}{2}}}} = \frac{\frac{1}{\sqrt{n\pi}} \times \frac{1}{2n+1}}{\frac{1}{2\sqrt{\pi}} \times \frac{1}{n^{\frac{3}{2}}}} = \frac{2\sqrt{\pi} n^{\frac{3}{2}}}{\sqrt{\pi n}(2n+1)} = \frac{2n^{\frac{3}{2}}}{2n^{\frac{3}{2}} + \sqrt{n}} \le 1$$

よって、 $a_n \leq \frac{1}{2\sqrt{\pi}} imes \frac{1}{n^{\frac{3}{2}}}$ なので、第V章定理2. 5と比較定理により $\sum a_n$ が

収束することがわかる。

(P. 340 例3)

$$x(x+1)(x+2)\cdots(x+n) = (x+n)(x+n-1)\cdots(x+1)x$$

$$\frac{\frac{\Gamma(x+n+1)}{\Gamma(n+1)}}{n^x} = \frac{x(x+1)(x+2)\cdots(x+n)\Gamma(x)}{n!n^x} = \frac{x(x+1)(x+2)\cdots(x+n)}{\frac{n!n^x}{\Gamma(x)}}$$

$$=1 (n \rightarrow +\infty)$$

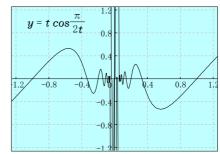
$$\frac{\Gamma(x+n+1)}{\Gamma(n+1)} = \frac{(x+n)\Gamma(x+n)}{n\Gamma(n)} \sim n^x \qquad \left(\frac{x+n}{n} = 1 \ (n \to +\infty)\right)$$

(P.343 例3)

$$f(t) = t\cos\frac{\pi}{2t}$$

$$t = \frac{1}{4n-k}$$
 とした場合、 $\cos x$

は偶関数なので、



$$\begin{split} f(t) &= \frac{1}{4n-k} \cos{(\frac{4n\,\pi}{2}\,-\frac{k\,\pi}{2})} = \frac{1}{4n-k} \cos{(2n\,\pi\,-\frac{k\,\pi}{2})} \\ &= \frac{1}{4n-k} \cos{(2n\,\pi\,\cos{(\frac{k\,\pi}{2})})} - \sin{(2n\,\pi\,\sin{(-\frac{k\,\pi}{2})})} = \frac{1}{4n-k} \cos{(\frac{k\,\pi}{2})} \\ k\,\, mod\,\, 4 &= 0 \to f(t) = \frac{1}{4n-k} \end{split}$$

$$k \mod 4 = 1 \rightarrow f(t) = 0$$

$$k \mod 4 = 2 \rightarrow f(t) = \frac{-1}{4n-k}$$

 $k \mod 4 = 3 \rightarrow f(t) = 0$

具体的にn=3の場合

$$\Delta_3: 0 < \frac{1}{12} < \frac{1}{11} < \frac{1}{10} < \frac{1}{9} < \frac{1}{8} < \frac{1}{7} < \frac{1}{6} < \frac{1}{5} < \frac{1}{4} < \frac{1}{3} < \frac{1}{2} < 1$$

つまり、両端を含めて4×3+1個の分点より成る。

$$f(0) = 0 , f(\frac{1}{12}) = \frac{1}{12} , f(\frac{1}{11}) = 0 , f(\frac{1}{10}) = \frac{-1}{10} , f(\frac{1}{9}) = 0 , f(\frac{1}{8}) = \frac{1}{8} , f(\frac{1}{7}) = \frac{1}{8}$$

$$= 0, f(\frac{1}{6}) = \frac{-1}{6}, f(\frac{1}{5}) = 0, f(\frac{1}{4}) = \frac{1}{4}, f(\frac{1}{3}) = 0, f(\frac{1}{2}) = \frac{-1}{2}, f(1) = 0$$

$$\ell(\Delta_3) = \sum_{i=1}^{13} |\Gamma(t_i) - \Gamma(t_{i-1})| = \sum_{i=1}^{13} \sqrt{(f(t_i) - f(t_{i-1}))^2 + (t_i - t_{i-1})^2}$$

$$\geq \sum_{i=1}^{13} \sqrt{(f(t_i) - f(t_{i-1}))^2} = \sum_{i=1}^{13} |f(t_i) - f(t_{i-1})|$$

$$= |f(t_1) - f(t_0)| + |f(t_2) - f(t_1)| + |f(t_3) - f(t_2)| + |f(t_4) - f(t_3)| + |f(t_5) - f(t_4)|$$

$$+|f(t_{5})-f(t_{5})|+\cdots+|f(t_{12})-f(t_{12})|$$

$$= \frac{1}{12} + \left| \frac{-1}{12} \right| + \left| \frac{-1}{10} \right| + \frac{1}{10} + \dots + \left| \frac{-1}{6} \right| + \frac{1}{6} + \frac{1}{4} + \left| \frac{-1}{4} \right| + \left| \frac{-1}{2} \right| + \frac{1}{2}$$

$$=1+\frac{1}{2}+\frac{1}{3}+\frac{1}{4}+\frac{1}{5}+\frac{1}{6}=\sum_{k=1}^{2\times 3}\frac{1}{k}$$

4n+1 個の分点の場合は

$$\ell(\Delta_n) \ge \sum_{k=1}^n \left\{ \frac{2}{4k} + \frac{2}{4k-2} \right\} = \sum_{k=1}^{2n} \frac{1}{k} \to +\infty \ (n \to +\infty)$$

したがって、その上限は +∞ となる。

(P.344 命題16.1)

D の分点は高々一個しか含まれない・・・

もし、分点 t_i 、 t_{i+1} が含まれていたとすれば、 $[t_i,t_{i+1}]$ $\subset I_n$ となり、 $d(I_n)$ > e となってしまう。

また、本文では、「いまIの内部にあるDの分点の総数をrとする。」とあるが、 Δ によって生ずる各小区間の内部には、Dの分点は高々一個しかないので、「そのような分点の総数をrとする。」と改めたほうがわかりやすいと思う。

(P.345 例5)

$$f: I = [a, b] \to R \quad (a < b \to f(a) \le f(b) \ge f(a))$$

$$\sum_{i=1}^{m} |f(t_i) - f(t_{i-1})| = \sum_{i=1}^{m} (f(t_i) - f(t_{i-1})) = f(b) - f(a)$$

(P.347 定理16.3の証明)

$$\begin{split} \mid \boldsymbol{\varepsilon}_{i} \mid &= \mid \boldsymbol{\ell}_{i} - \mid \boldsymbol{f}'(\boldsymbol{t}_{i}) \mid \mid \leq \left(\sum_{k=1}^{n} \mid \boldsymbol{f}_{k}'(\boldsymbol{\tau}_{ki}) - \boldsymbol{f}_{k}'(\boldsymbol{t}_{i}) \mid^{2} \right)^{\frac{1}{2}} \end{aligned}$$

$$\mid \boldsymbol{a} \mid \leq \mid \boldsymbol{b} \mid + \mid \boldsymbol{a} - \boldsymbol{b} \mid \rightarrow \mid \boldsymbol{a} \mid - \mid \boldsymbol{b} \mid \leq \mid \boldsymbol{a} - \boldsymbol{b} \mid$$

$$\boldsymbol{d}_{i} = \begin{pmatrix} \boldsymbol{f}_{1}'(\boldsymbol{\tau}_{1i}) \\ \vdots \\ \boldsymbol{f}_{n}'(\boldsymbol{\tau}_{ni}) \end{pmatrix} \succeq \boldsymbol{f} \boldsymbol{\mathcal{S}}_{o} \boldsymbol{f}'(\boldsymbol{t}_{i}) = \begin{pmatrix} \boldsymbol{f}_{1}'(\boldsymbol{t}_{i}) \\ \vdots \\ \boldsymbol{f}_{n}'(\boldsymbol{t}_{i}) \end{pmatrix} \boldsymbol{\mathcal{F}} \boldsymbol{\mathcal{F}}$$

$$\ell_i = |d_i| = (\sum_{k=1}^n (f_k' (\tau_{ki})^2)^{\frac{1}{2}})^{\frac{1}{2}}$$

$$\varepsilon_i = \mid d_i \mid - \mid f'(t_i) \mid \leq \mid \begin{pmatrix} f_1'(\tau_{1i}) \\ \vdots \\ f_n'(\tau_{ni}) \end{pmatrix} - \begin{pmatrix} f_1'(t_i) \\ \vdots \\ f_n'(t_i) \end{pmatrix} \mid = \left(\sum_{k=1}^n \mid f_k'(\tau_{ki}) - f_k'(t_i) \mid^2\right)^{\frac{1}{2}}$$

また、

$$\left(\sum_{k=1}^{n} |f_{k}'(\tau_{ki}) - f_{k}'(t_{i})|^{2}\right)^{\frac{1}{2}} < \sqrt{n(\frac{\varepsilon}{n(b-a)})^{2}} = \sqrt{\frac{\varepsilon^{2}}{n(b-a)^{2}}} = \frac{\varepsilon}{\sqrt{n}(b-a)}$$

 $\int_a^b |f'(t)| dt$ は定理3. 5から存在するので、それを s とおいた。 言い換えると、任意の分割 $\Delta \in \mathfrak{D}$ に対し、代表点 ξ_k の取り方によらず常に s になるのであるから、 $\lim_{d(\Delta)\to 0} \sum_{i=1}^m |f'(t_i)| (t_i-t_{i-1})=s$

(P.347 例6)

$$\begin{aligned} \cos\theta &= \cos(\frac{\theta}{2} + \frac{\theta}{2}) = \cos^2\frac{\theta}{2} - \sin^2\frac{\theta}{2} = 1 - 2\sin^2\frac{\theta}{2} \text{ is } \\ (1 - \cos\theta)^2 + \sin^2\theta &= 1 - 2\cos\theta + 1 = 2 - 2\cos\theta = 2(1 - \cos\theta) = 4\sin^2\frac{\theta}{2} \end{aligned}$$

$$2a \int_{0}^{2\pi} \sin \frac{\theta}{2} d\theta = 4a \int_{0}^{\pi} \sin t \, dt = 4a [-\cos t]_{0}^{\pi} = 4a \cdot (1 - (-1)) = 8a$$

(P.348 例7)

$$t = \sqrt{x} \rightarrow \frac{dt}{dx} = \frac{1}{2} \frac{1}{\sqrt{x}} \rightarrow \int_0^x \sqrt{\frac{x+1}{x}} dx = \int_0^t \frac{\sqrt{t^2+1}}{t} 2t dt$$
$$= 2 \int_0^t \sqrt{t^2+1} dt$$

(P.350 命題17.1)

$$\mid (f+g)(t) - (f+g)(s) \mid = \mid f(t) + g(t) - (f(s) + g(s)) \mid = \mid f(t) - f(s) + g(t) - g(s) \mid$$

$$\mid (f-g)(t) - (f-g)(s) \mid = \mid f(t) - g(t) - (f(s) - g(s)) \mid = \mid f(t) - f(s) + g(s) - g(t) \mid$$

$$\uparrow_{\mathcal{EO}} \circlearrowleft .$$

$$\mid (f+g)(t)-(f+g)(s)\mid \leq \mid f(t)-f(s)\mid +\mid g(t)-g(s)\mid$$

Iの分割 Δ が(16.1)で与えられているとして、f-gならば

$$v_{_{\Delta}}(f-g) = |\ (f-g)(t_{_{i'}}) - (f-g)(t_{_{i-1}})\ | = |\ f(t_{_{i'}}) - f(t_{_{i-1}}) - g(t_{_{i'}}) + g(t_{_{i-1}})\ |$$

$$\leq |f(t_{\scriptscriptstyle i}) - f(t_{\scriptscriptstyle i-1})| + |g(t_{\scriptscriptstyle i}) - g(t_{\scriptscriptstyle i-1})| = v_{\scriptscriptstyle \Lambda}(f) + v_{\scriptscriptstyle \Lambda}(g)$$

次の不等式については

$$\mid (fg)(t) - (fg)(\mathbf{S}) \mid = \mid f(t)g(t) - f(\mathbf{S})g(\mathbf{S}) \mid$$

$$= \mid f(t)g(t) - f(t)g(\mathbf{S}) + f(t)g(\mathbf{S}) - f(\mathbf{S})g(\mathbf{S}) \mid$$

$$= | f(t) \{ g(t) - g(s) \} + g(s) \{ f(t) - f(s) \} | \leq A | g(t) - g(s) | + B | f(t) - f(s) |$$

(P.351 定理17.3)

定理17.2 から $\phi(x)$ が有限であり定まる。また、 $V \ge 0$ は $\phi(a) = 0$ なので ϕ が単調増加関数となる。

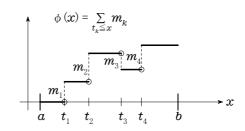
また、
$$V(x, y; f)-(f(y)-f(x)) \ge 0$$
 については

 $f(x) \ge f(y)$ ならば問題ない。 $f(x) \le f(y)$ なら $|f(y)-f(x)| \le V(x,y;f)$ は 定義から明らかである。

(P.352 例3)

p = 4 として $\phi(x)$ をイメイージしてみると

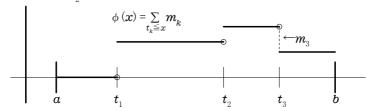
定点 $a < t_1 < t_2 < t_3 < t_4 < b$ それに対し実数 m_i を対応 させるとする。 $m_3 < 0$,他は 正とする。



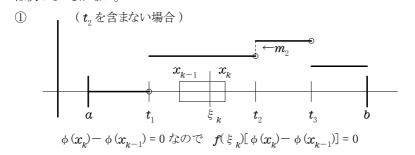
 ϕ が有界変動であることは、 $[t_{i-1},t_i]$ において、 t_i では、右連続であり、 $\phi(x)=\sum_{t_k \le x} m_k$ なので、 $\phi(t_i) = \sum_{t_k \le t_i} m_k$ となる。またそれ以外の点では、 $\phi(x) = \sum_{t_k \le x} m_k$ つまり定数となる。よって、 $[t_{i-1},t_i]$ の任意の分割 Δ をとったとき、 $v_{\Delta} = \sum_{j=1}^m |\phi(x_j) - \phi(x_{j-1})| = |\sum_{t_k \le t_i} m_k - \sum_{t_k \le x} m_k| = |m_{t_i}|$ となり、 $[t_{i-1},t_i]$ で有界変動となる。よって、各区間 $[t_{i-1},t_i]$ で有界変動なので、定理17.2より、 ϕ は、[a,b] で有界変動となる。

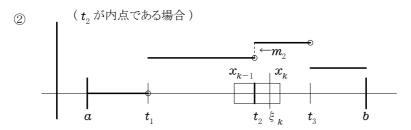
後半については、

(k=3) の場合、 t_2 に関する部分だけ考える)



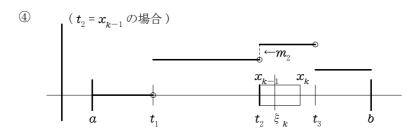
 $d(\Delta)$ < $\min_{1\leq j\leq p}(t_j-t_{j-1})$ とし、 $d(\Delta)\to 0$ としても、区間 $[x_{k-1}$, $x_k]$ の置かれ場所は次の4つしかない。





$$d(\Delta) \rightarrow 0$$
 つまり $x_k - x_{k-1} \rightarrow 0$ ならば
$$f(\xi_k)[\phi(x_k) - \phi(x_{k-1})] \rightarrow f(t_2 \pm 0)[\phi(t_2 + 0) - \phi(t_2 - 0)] = f(t_2)m_2$$

$$d(\Delta) \rightarrow 0$$
 つまり $x_k - x_{k-1} \rightarrow 0$ ならば
$$f(\xi_k)[\phi(x_k) - \phi(x_{k-1})] \rightarrow f(t_2 - 0)[\phi(t_2) - \phi(t_2 - 0)] = f(t_2)m_2$$



$$d(\Delta) \rightarrow 0$$
 つまり $x_k - x_{k-1} \rightarrow 0$ ならば
$$f(\xi_k)[\phi(x_k) - \phi(x_{k-1})] \rightarrow f(t_2 + 0)[\phi(t_2 + 0) - \phi(t_2)] = 0$$

以上により、 $d(\Delta) \to 0$ つまり、 $x_k - x_{k-1} \to 0$ ならば ②、③の場合のみ $f(t_2)m_2$ となる。したがって、 $\int_a^b fd\phi = \sum_{j=1}^3 m_j f(t_j)$ 一般に p の場合でも同様である。

(P.353 定理17.5)

$$\begin{split} & f(\,\xi_{\,k})\!\{\,(\,\phi\,\pm\,\phi\,)\!(x_{k})\!-\!(\,\phi\,\pm\,\phi\,)\!(x_{k-1})\,\} \\ & = f(\,\xi_{\,k})\!\{\,\,\phi\,(x_{k})\!-\,\phi\,(x_{k-1})\,\}\!\pm\!f(\,\xi_{\,k})\!\{\,\,\phi\,(x_{k})\!-\,\phi\,(x_{k-1})\,\} \end{split}$$

(P.353 定理17.6)

(P.354 φが単調増加関数である必要性)

 $+ f(x_{m-1})[\phi(\xi_m) - \phi(x_{m-1})] + f(x_m)[\phi(x_m) - \phi(\xi_m)]$

単調増加であれば $(\Delta \phi)_{k} = \phi(x_{k}) - \phi(x_{k-1}) \ge 0$ である。 また、a < b < c に対し、 $\phi(a) < \phi(b) < \phi(c)$ なので $\phi(a) - \phi(c) = \phi(a) - \phi(b) + \phi(b) - \phi(a)$ これを唯一つの分点をある辺で追加 して得られる場合に利用すれば、命題3.1の2)と同様にして証明できる。よって $(17.17) \quad \Delta \leq \Delta' \Rightarrow s_{\Lambda} \leq s_{\Lambda'} \leq s_{\Lambda'} \leq s_{\Lambda'}$ (17.18) 任意の Δ, Δ に対し $s_{\Lambda} \leq S_{\Lambda}$

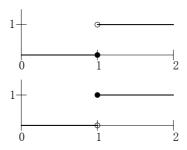
を得る。

 $= s(f; \phi; \Delta'; x)$

(P.355 例4)

$$f(x) = \begin{cases} 0 , x \in [0, 1] \\ 1 , x \in [1, 2] \end{cases}$$

$$\phi(x) = \left\{ \begin{array}{l} 0 , x \in [0, 1) \\ 1 , x \in [1, 2] \end{array} \right.$$



0 , 1 , 2を分点とする I = [0 , 2] の分割 Δ_0 をとるとき、 I_1 = [0 , 1] , I_2 = [1 ,

2]に対するfの下限 m_1 , m_2 は m_1 = m_2 =0、上限 M_1 , M_2 は M_1 =0, M_2 =1

$$(\Delta \phi)_1 = \phi(1) - \phi(0) = 1 - 0 = 1$$
 $(\Delta \phi)_2 = \phi(2) - \phi(1) = 1 - 1 = 0$ だから

$$\mathbf{s}_{\Delta_0} = 0 \times 1 + 0 \times 0 = 0 = \mathbf{S}_{\Delta_0} = 0 \times 1 + 1 \times 0$$

したがって、(17.19) により s = S = 0 となる。

しかし、1 を分点に含まない I の任意の分割 $\Delta: 0 = x_0 < x_1 < \cdots < x_m = 2$ をとり

 $x_{j-1} < 1 < x_j$ であるとする。このとき

$$(\Delta \phi)_{k} = \phi(x_{k}) - \phi(x_{k-1}) = 0 - 0 = 1 - 1 = 0$$
 $(k \neq j)$

$$(\Delta \phi)_{i} = \phi(x_{i}) - \phi(x_{i-1}) = 1 - 0 = 1$$

$$\boldsymbol{m}_i = 0$$
 , $\boldsymbol{M}_i = 1$

だから

$$\mathbf{S}_{\Lambda} = 0 + \dots + 0 \times 1 + 0 + \dots + 0 = 0$$
, $\mathbf{S}_{\Lambda} = 0 + \dots + 1 \times 1 + 0 + \dots + 0 = 1$

したがって、 $d(\Delta)$ をいくら小さくしても Δ が 1 を分点に含まない限り S_{Δ} = 1

よって

$$\lim_{d(\Delta)\to 0} S_{\Delta} = 1 \neq S = \inf S_{\Delta} = 0$$

つまり、ダルブーの定理が成り立たない。

(P355 定理17.7)

 $b) \Leftrightarrow c)$

$$\lim_{d(\Delta) \to 0} \left(\mathbf{S}_{\Delta} - \mathbf{s}_{\Delta} \right) = \lim_{d(\Delta) \to 0} \sum_{k=1}^{m} \left\{ \left. \mathbf{\textit{M}}_{k} (\phi \left(\mathbf{\textit{x}}_{k} \right) - \phi \left(\mathbf{\textit{x}}_{k-1} \right) \right) - \mathbf{\textit{m}}_{k} (\phi \left(\mathbf{\textit{x}}_{k} \right) - \phi \left(\mathbf{\textit{x}}_{k-1} \right) \right) \right\}$$

$$=\lim_{d(\Delta)\to 0}\sum_{k=1}^m \{\; (\textbf{\textit{M}}_k-\textbf{\textit{m}}_k)(\; \phi\; (\textbf{\textit{x}}_k)-\; \phi\; (\textbf{\textit{x}}_{k-1})\; \} = \lim_{d(\Delta)\to 0}\sum_{k=1}^m a(\textbf{\textit{f}}\; ,\; \textbf{\textit{I}}_k)(\; \Delta\; \; \phi\;)_k$$

a) \Rightarrow b) P.217 定理3. 3の証明を真似してみる。

f が ϕ に関しI 上 S 可積分であるとする。 $\int^b f d \phi = J$ と置く。 定義からこのとき 任意の $\epsilon > 0$ に対し $\delta > 0$ が存在し、 $d(\Delta) < \delta$ となる任意の分割 Δ と代表点 $\xi_{k} \in I_{k}$ の任意の取り方に対し

$$-\frac{\varepsilon}{2} < \mathbf{s}(f; \phi; \Delta; \xi) - J < \frac{\varepsilon}{2}$$

が成り立つ。f, Δ を固定して I_k の代表点 ξ_k を I_k の中を動かしたときの s(f; ϕ ; Δ ; ξ) の上限、下限が S_Λ , S_Λ である。(命題 1.6.1) 従って、上の不等 式から.

 S_{Λ} は $s(f; \phi; \Delta; \xi)$ の上限なので、右の不等号が \leq となる。

$$J-\frac{\varepsilon}{2} < S_{\Delta} \leqq J+\frac{\varepsilon}{2} \quad \leftarrow \quad (\implies \sup [0 \ , \ \varepsilon) = \varepsilon \)$$

よって、より広い範囲に含まれるので

$$J - \frac{\varepsilon}{2} \le S_{\Delta} \le J + \frac{\varepsilon}{2}$$

同様にして、 s_{Λ} は $s(f; \phi; \Delta; \xi)$ の下限なので、左の不等号が \leq となる。

$$J - \frac{\varepsilon}{2} \le s_{\Delta} < J + \frac{\varepsilon}{2}$$

$$J - \frac{\varepsilon}{2} \le \mathbf{s}_{\Delta} \le J + \frac{\varepsilon}{2}$$

より広い範囲に含まれるので $J-\frac{\varepsilon}{2} \le s_{\Delta} \le J+\frac{\varepsilon}{2}$ $J-\frac{\varepsilon}{2}$ J $J+\frac{\varepsilon}{2}$

を得る。ゆえに

$$0 \le S_{\Delta} - s_{\Delta} = S_{\Delta} - J + J - s_{\Delta} \le \frac{\varepsilon}{2} + \frac{\varepsilon}{2} = \varepsilon$$

これは b) を意味する。

(注意 a が単調増加であることは (17.19) を使うためである。)

(P356 定理17.8)

$$\sup_{t,s\in I_k} \mid f(t)-f(s)\mid = M_k-m_k \\ \text{(証明)} \mid f(t)-f(s)\mid \leq \sup_{t\in I_k} f(t)-\inf_{t\in I_k} f(t) \qquad \qquad f(s) \qquad f(t) \\ \inf_{t\in I_k} f(t) \qquad \qquad \sup_{t\in I_k} f(t) \qquad \qquad \lim_{t\in I_k} f$$

よって
$$\sup_{t,s\in I_k} |f(t)-f(s)| \leq \sup_{t\in I_k} f(t) - \inf_{t\in I_k} f(t)$$
 故に、 $0 \leq \sup_{t\in I_k} f(t) - \inf_{t\in I_k} |f(t)-f(s)|$ … ①

次に、命題1.4から任意の ε>0 に対して

$$\sup_{t \in I_k} f(t) - \frac{\varepsilon}{2} < f(t_0) \text{ , } \inf_{t \in I_k} f(t) + \frac{\varepsilon}{2} > f(s_0) \text{ となる } t_0 \text{ , } s_0 \in I_k \text{ が存在する}.$$

$$-\inf_{t \in I_k} f(t) - \frac{\varepsilon}{2} < -f(s_0) \text{ なので}$$

$$\sup_{t \in I_k} f(t) - \inf_{t \in I_k} (t) - \operatorname{\epsilon} \langle f(t_0) - f(s_0) \leq |f(t_0) - f(s_0)| \leq \sup_{t,s \in I_k} |f(t) - f(s)| \cdots 2$$

①、②から

$$0 \leq \sup_{t \in I_k} \mathit{f}(t) - \inf_{t \in I_k} \mathit{f}(t) - \sup_{t,s \in I_k} |\mathit{f}(t) - \mathit{f}(s)| < \varepsilon$$

$$\text{P.4 (1.5) \sharp} \text{9.} \sup_{\substack{t,s \in I_k \\ t}} \left| f(t) - f(s) \right| = \sup_{t \in I_k} f(t) - \inf_{t \in I_k} f(t) = M_k - m_k$$

$$M_k - m_k \le \frac{\varepsilon}{c}$$
 の \le は上限だからである。

(P357 定理17.9(17.23))

(P357 命題17.10)

1) 単調性

任意の分割 $\Delta \in \mathfrak{D}$ と $\xi_{k} \in I_{k}$ $(k \in K(\Delta))$ に対し、仮定から、

$$\begin{split} \mathbf{s}(\mathbf{f};\phi\;;\Delta\;;\,\xi\;) &= \sum_{k=1}^{m} \mathbf{f}(\;\xi\;_{k})[\;\phi\;(\mathbf{x}_{k}\;) - \;\phi\;(\mathbf{x}_{k-1})] \; \geqq \; \sum_{k=1}^{m} \mathbf{g}(\;\xi\;_{k})[\;\phi\;(\mathbf{x}_{k}\;) - \;\phi\;(\mathbf{x}_{k-1})] \\ &= \mathbf{s}(\mathbf{g};\phi\;;\Delta\;;\,\xi\;) \end{split}$$

なので、 $d(\Delta)$ →0 を考えれば定理を得る。

2) 三角不等式

$$||f(x)|-|f(y)|| \le |f(x)-f(y)|$$
 (P.4 命題1.2に追加参照)

よって、任意の $k \in K(\Delta)$ に対し、

 $0 \le a(|f|,I_k)(\Delta \phi)_k \le a(f,I_k)(\Delta \phi)_k$ なので、|f|も ϕ に関し S 可積分となる。また、 ϕ は単調増加なので、

$$\begin{aligned} |\mathbf{s}(f;\phi;\Delta;\xi)| &= |\sum_{k=1}^{m} f(\xi_{k})[\phi(x_{k}) - \phi(x_{k-1})]| \leq \sum_{k=1}^{m} |f(\xi_{k})|[\phi(x_{k}) - \phi(x_{k-1})]| \\ &= \mathbf{s}(|f|;\phi;\Delta;\xi) \end{aligned}$$

(P357 定理17.11(第一平均値定理)) 定理2.3を真似て

(証明) 任意の $x \in I$ に対し

 $m \leq f(x) \leq M$

だから、積分の単調性(命題17.10)とP.352 例2より

$$(17.25) \qquad m(\phi(b) - \phi(a)) \leq \int_{a}^{b} f d \phi \leq M(\phi(b) - \phi(a))$$

そこで $\phi(a) = \phi(b)$ ならば m と M の間に任意の実数 μ に対し (17.26) が成り

立つ。
$$\phi(b) - \phi(a) > 0$$
 ならば $\frac{1}{\phi(b) - \phi(a)} \int_a^b f d\phi = \mu$ とおけば (17.25) によ

り、
$$m \leq \mu \leq M$$
 だから

(17.26)
$$\int_{a}^{b} f d \phi = \mu \left(\phi \left(b \right) - \phi \left(a \right) \right)$$

が成り立つ。

特に、f が連続ならば、I 章定理8. 1(中間値の定理) から $\mu = f(c)$ となる $c \in I$ が存在する。

(P359 定理17.13系の2)

2) $\phi_0(x) = -\phi(x)$ ($x \neq b$), $\phi_0(b) = 0$ とおけば、 $\phi_0(x)$ は単調増加関数になるので、定理8.6 系2と定理17.13より、ある $\xi \in I$ が存在して

$$-\int_{a}^{b} f(x) \phi(x) dx = \int_{a}^{b} f(x) \phi_{0}(x) dx = \phi_{0}(a) \int_{a}^{\xi} f(x) dx + \phi_{0}(b) \int_{\xi}^{b} f(x) dx$$

$$= \phi_{0}(a) \int_{a}^{\xi} f(x) dx = -\phi(a) \int_{a}^{\xi} f(x) dx$$

$$\downarrow \sim \subset \int_{a}^{b} f(x) \phi(x) dx = \phi(a) \int_{a}^{\xi} f(x) dx$$

(P.360例5、ディリクレ積分)

(17.32)
$$\lim_{t \to +\infty} \int_{0}^{a} f(x) \frac{\sin tx}{x} dx = \frac{\pi}{2} f(+0) \quad (a > 0)$$

f 有界変動関数なので有界である。また f は [0, a] で単調増加としたので P.54 例5 から、f(+0) は存在し有限である。

次に、定理17.13系を使いたいのだが、

$$\frac{\sin tx}{x}$$
 が $x=0$ で連続かということである。 $\sin x=\sum\limits_{n=0}^{\infty}\frac{(-1)^n}{(2n+1)!}x^{2n+1}$ から、 $\sin tx=tx-\frac{(tx)^3}{3!}+\frac{(tx)^5}{5!}-\cdots$ なので $\frac{\sin tx}{x}=t$ $(x=0)$ と定めれば

連続となる。よって、 $\frac{\sin tx}{x}$ は [0,a]上で可積分である。また z=tx とおけば

$$\int_0^a \frac{\sin tx}{x} dx = \int_0^{ta} \frac{\sin z}{\frac{z}{t}} \frac{1}{t} dz = \int_0^{ta} \frac{\sin z}{z} dz = \int_0^{ta} \frac{\sin x}{x} dx$$

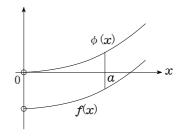
となり、(17.32) は

(17.33)
$$\lim_{t \to +\infty} \int_{0}^{a} [f(x) - f(+0)] \frac{\sin tx}{x} dx = 0$$

と書き直せる。 $\phi(x) = f(x) - f(+0)$ とおけば ϕ は有界な単調増加である。

(17.34)
$$x > 0$$
 $(x) \ge 0$, $\phi(+0) = 0$

$$\lim_{t \to +\infty} \int_0^a \phi(x) \frac{\sin tx}{x} dx = 0$$



を証明すればよいことになる。

(17.34) の ϕ (+0) = 0 から $\lim_{x\to 0+0} \phi(x)$ = 0 だから、任意の ϵ > 0 に対して、x を 右から 0 に近づけていけば 0 $\leq \phi(x)$ < ϵ とすることができる。そのような x を ϵ とおいて、

$$(17.36) \quad 0 < \mathbf{c} < \mathbf{a} , 0 \leq \phi(\mathbf{c}) < \varepsilon$$

とすることができる。ここで、 ϕ は有界な単調増加関数なので、定理3. 4から可積分となる。また P.359の注意2(証明してないが)から、定理17. 13 系 を無理して区間 [0,c] に使うと、ある $\xi \in [0,c]$ が存在して

$$(17.37) \qquad \int_{0}^{c} \phi(x) \frac{\sin tx}{x} dx = \phi(c) \int_{\xi}^{c} \frac{\sin tx}{x} dx = \phi(c) \int_{\xi t}^{ct} \frac{\sin x}{x} dx$$

2番目の等号はz=tx と置けば、 $x=\xi \rightarrow z=\xi t$, $x=c \rightarrow z=ct$

$$\int_{\xi}^{c} \frac{\sin tx}{x} dx = \int_{\xi t}^{\xi c} \frac{\sin z}{z} dz$$

からである。

(17.36)の 2M について

$$\begin{split} & |\int_{0}^{x} \frac{\sin x}{x} dx | \leq M \quad (x \in [0, +\infty]) \quad \text{ かかで} \\ & |\int_{\varepsilon_{t}}^{ct} \frac{\sin x}{x} dx | \leq |\int_{0}^{\varepsilon_{t}} \frac{\sin x}{x} dx | + |\int_{0}^{ct} \frac{\sin x}{x} dx | \leq 2M \\ & \text{よって} \\ & (17.38) \quad |\int_{0}^{c} \phi(x) \frac{\sin tx}{x} dx | \leq 2M \phi(c) < 2M \varepsilon \end{split}$$

(17.40) については

P. 292のコーシーの条件から、 $\int_0^\infty \frac{\sin x}{x} dx$ は存在するので、任意の $\epsilon > 0$ に対し、ある $\ell \in I = [0, +\infty)$

が存在して、 ℓ < $t_0\eta$ < t_0a < $+\infty$ となる t_0 を一つ決めれば、 t_0 < t 対して、

$$\ell < t\eta < ta < +\infty \rightarrow |\int_{t\eta}^{ta} \frac{\sin x}{x} dx | < \varepsilon$$
 とすることができる。

(P.362 命題1.1 空集合の上界)

 $\overline{U}(\varnothing) = \overline{R}$ (20)

任意の $x \in \overline{R}$ に対し、 $\emptyset \subset \{x\}$ なので I 章(1. 11) から $U(\emptyset) \supset U(\{x\})$ となる。 x はどんなに小さくしてもよいので、 $\overline{U}(\emptyset) = \overline{R}$ と考えるしかない。 (だまされたようだが) 初めの二つは $\overline{U}(\emptyset) = \overline{R}$ だから $Min(\overline{U}(A)) = -\infty$ で後ろの二つは $Min(\overline{U}(A)) = +\infty$ である。 (ここは読み方に注意)

(P.364 定理1.4上極限)

 $\overline{\lim}_{n\to+\infty} a_n$ (上極限)

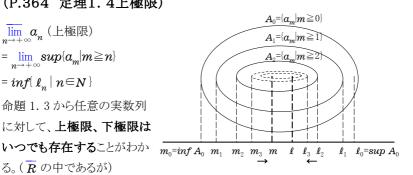
$$= \lim_{n \to +\infty} \sup \{a_m | m \ge n\}$$

=
$$inf\{ l_n | n \in N \}$$

命題 1.3 から任意の実数列

に対して、上極限、下極限は

る。(\overline{R} の中であるが)



(例)

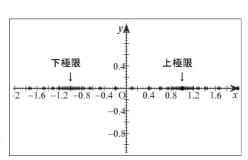
$$a_n = \sqrt{2} \sin(\frac{\pi}{4} + \frac{\pi n}{2}) + (-\frac{9}{10})^n$$

上極限 = 1

下極限 = -1

$$n = 0, 1, 2, 3, 4, \cdots$$

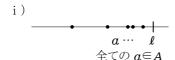
$$sin(\frac{\pi}{4}+\frac{\pi\,\textbf{n}}{2})$$
 = 1 , 1 , -1 , -1 , \cdots

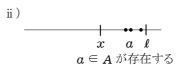


(上限、下限の性質)

 $\ell \in \mathbb{R}$ が $A \subseteq \mathbb{R}$ の上限であることは、次の i)、ii)で特徴づけられる。

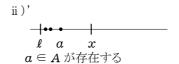
- i) 任意の $a \in A$ に対し、 $a \leq \ell$
- ii) $x < \ell$ となる任意の $x \in \overline{R}$ に対し、 $x < \alpha$ となる $\alpha \in A$ が存在する。





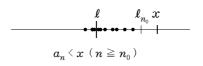
(下限については)

i)' $\ell \quad a \cdots$ 全ての $a \in A$



(証明を読む前の注意)

b)i)…十分大きなすべての n \in N に対し a_n < x \cdots 正確には、ある n_0 \in N が存在し、n > n_0 ならば a_n < x とすることができる。



ii)の… $y < a_n$ となる $n \in N$ は無限に存在する。nを決めるたびに一つ以上あるので無限個あることになる。

$$y$$
 ℓ ℓ_n $y < a_{m_n} \le \ell_n \ (m_n \ge n)$ は一つ以上ある。

証明)a) \Leftrightarrow b)だけにする。

a) \Rightarrow b) i) ℓ 〈 x ならば、 ℓ = inf{ ℓ_n $\mid n$ \in N} は単調減少列 ℓ_n の下限であるので ℓ_{n_0} 〈 x となる n_0 \in N が存在し、このときすべての n $\geq n_0$ に対し ℓ_{n_0} = sup{ ℓ_n $\mid m$ 0} なので ℓ_n 0 ℓ_n 0 べ ℓ_n 2 である。

ii) $y < \ell$ ならば、すべての $n \in N$ に対し、 $y < \ell \le \ell_n = \sup\{a_m | m \ge n\}$ であるから ℓ_n は上限であり性質 ii)より、集合 $\{a_m | m \ge n\}$ の なかで、 $y < a_{m_n} \le \ell_n$ となる $a_{m_n} (m_n \ge n)$ が一つは存在する。ここで、n は任意であるから、 $y < a_m$ となる $m \in N$ は無限にある。 $(a_m = a_m$ であっても、 $m_n \ne m_n$ であればよい。)

b) ⇒ a) いま ℓ ' = $\overline{\lim}_{n \to +\infty} a_n = \lim_{n \to +\infty} \sup\{a_m | m \ge n\} = \lim_{n \to +\infty} \ell_n$ とし、b) を満たす ℓ に対して ℓ ' = ℓ を示す。 ℓ 〈 x となる任意の $x \in \overline{R}$ に対し、b) i)から n_0 が存在して、 $n \ge n_0$ ならば a_n 〈 x となる。そこで、 $\ell_{n_0} = \sup\{a_m | m \ge n_0\}$ なので、x を一つの上界と考えれば、 $n \ge n_0$ ならば、 ℓ ' $\le \ell_{n_0} \le x$ となる。x は ℓ 〈 x となる任意の元であるから、 ℓ ' $\le \ell$ となる。(もし、 ℓ 〈 ℓ ' ならば、 ℓ 〈 ℓ ' となる x があるから、 ℓ ' $\le \ell_{n_0} \le x$ に反する。)

次に、 $y < \ell$ となる任意の y をとると、b) ii)から、 $y < a_n \le \ell_n$ となる $n \in N$ が無限に存在する。これから、 $y \le \ell$ が導き出せる。(実際 ℓ ' < y ならば、a) $\Rightarrow b$) i)により有限個の n を除き $y > a_n$ となり、 $y \le a_n$ となる a_n は有限個しかないので

上のことに反する。) y は $y < \ell$ となる任意の元なので、 $\ell \le \ell$ 'となる。(もし ℓ 〉 ℓ ' ならば、 ℓ > y > ℓ ' となる y をとれば $y \le \ell$ ' に矛盾する。)以上で、 ℓ = ℓ 'が証明された。

定理1.4を下極限に置き換えると

実数列 $(a_n)_{n\in\mathbb{N}}$ と $m\in\overline{R}$ に対し、次の a), b), c), d) は互いに同値である。

$$a$$
)' $m = \underbrace{\lim}_{n \to +\infty} a_n$

b)'

- i) m > x となる任意の $x \in \overline{R}$ を定めたとき、十分大きなすべての $n \in N$ に対しし $a_n > x$ となる。
- ii) y > m となる任意の $y \in \overline{R}$ に対し、 $y > a_n$ となる $n \in N$ は無限に存在する。
- c)' m に収束する $(a_n)_{n\in\mathbb{N}}$ の部分列が存在する。 x < m となる x に収束する (a_n) の部分列は存在しない。
- d)'m は数列 $(a_n)_{n\in\mathbb{N}}$ の \overline{R} における集積値の内最小のものである。

(P. 365 命題1.5 a)⇒b))

ℓのかわりに b とする。(誤解しやすい)

a) が成り立つとき I 章 (3. 18) により、 $(a_n)_{n\in\mathbb{N}}$ の任意の部分列は すべて b に 収束する。また、b より大きい値に、または、小さい値に収束する部分列は存在しないので、定理1. 4c)、c)'により、 $\overline{\lim_{n\to+\infty}}a_n=b=\underline{\lim_{n\to+\infty}}a_n$

(P.367 なぜ上極限が必要なのか)

定理2. 1 は $\frac{a_{n+1}}{a_n} = b_n$ として、 $\overline{\lim}_{n \to +\infty} b_n$ と考えればよい。ここで上極限を使う利点は b_n が収束しなくても上極限は存在するからである。定理2. 2、定理2. 3 も同ようである。例 1 では a_n は収束しない。しかし、上極限は 1 である。

(P. 368 例2)

 $(z-a)\sum_{n=1}^k na_n(z-a)^{n-1}=\sum_{n=1}^k na_n(z-a)^n$ から収束半径が有限ならば両者の収束半径は一致する。収束半径が $+\infty$ であっても任意の $z<+\infty$ に対し、どちら

かが収束すればもう一方も収束する。つまり、収束半径は一致する。

$$\frac{\log x}{x} \ge 0 \quad (x \ge 1) \% \mathcal{O} \mathcal{T} e^{\frac{\log x}{x}} \ge 1 \text{ よって } 1 \le e^{\frac{\log x}{x}} \to 1 \quad (x \ge 1)$$

$(P.368 \sum \frac{1}{n^8}$ の収束発散の判定)

$$a_n = \frac{1}{n^s}$$
, $a_{n+1} = \frac{1}{(n+1)^s}$ $\Rightarrow \lim_{n \to \infty} \frac{a_{n+1}}{a_n} = \lim_{n \to \infty} (\frac{n}{n+1})^s = 1$ Each $(1 < 1)$

はなく、= 1 なので判定できない。つまり、定理2.1 は使えない。さらに、s=1 の場合、収束しないことはすでに知っている。

(P. 369 例3)

最初の有限項を除いても判定には影響しないので、

s=0 の場合は、 $\sum_{n=2}^{\infty}\frac{1}{n}$ となり、 $\sum_{n=1}^{\infty}\frac{1}{n}$ が発散することから発散することがわかる。

また、s < 0 の場合は、-a = s とすれば、

$$\sum_{n=2}^{\infty} \frac{1}{n(\log n)^{-a}} = \sum_{n=2}^{\infty} \frac{(\log n)^a}{n}$$

CCC, n = 2 からとしているのは, log 1 = 0 だからである。また, $n \ge 3$ ならば、

 $\log n > 1 \rightarrow (\log n)^a > 1 \ge t \le 0$

$$n \ge 3$$
 ならば、 $\frac{1}{n} < \frac{(\log n)^a}{n}$ となる。したがって、 $\sum\limits_{n=1}^{\infty} \frac{1}{n}$ が発散することから、I

章定理5.5,2)により発散することがわかる。

(s≠1 の場合)

$$log x = t \rightarrow x = e^t \rightarrow \frac{dx}{dt} = e^t$$

$$\int \frac{1}{x(\log x)^{s}} dx = \int \frac{e^{t}}{e^{t}t^{s}} dt = \int \frac{1}{t^{s}} dt = \frac{1}{1-s} t^{1-s} = \frac{1}{1-s} (\log x)^{1-s}$$

(8=1の場合)

$$\int \frac{1}{x \log x} dx = \int \frac{e^t}{e^t t} dt = \int \frac{1}{t} dt = \log t = \log(\log x)$$

また

$$\int \frac{1}{x \log x (\log \log x)^s} dx = \int \frac{e^t}{e^t t (\log t)^s} dt = \int \frac{1}{t (\log t)^s} dt$$

収束、発散について上と同様になる。

loglog n については、n = 2 の場合、log 2 < 1 となり、loglog n < 0 となってしまうため n は 3 からとしている。

(P. 369 例4)

$$a_{n} - a_{n+1} = 1 + \frac{1}{2} + \dots + \frac{1}{n} - \log n - (1 + \frac{1}{2} + \dots + \frac{1}{n+1} - \log (n+1))$$

$$= \log (n+1) - \log n - \frac{1}{n+1} > 0$$

$$\begin{split} &a_n = \sum_{k=1}^{n-1} \big\{ \frac{1}{k} - \int_k^{k+1} \frac{dx}{x} \big\} + \frac{1}{n} = \sum_{k=1}^{n-1} \big\{ \frac{1}{k} - [\log x]_k^{k+1} \big\} + \frac{1}{n} \\ &= 1 + \frac{1}{2} + \dots + \frac{1}{n} - \{\log 2 - \log 1 + \log 3 - \log 2 + \dots + \log n - \log (n-1)\} \\ &= 1 + \frac{1}{2} + \dots + \frac{1}{n} - \log n \\ &= (\log_{10} a = x \text{ if } b \text{ if } \log a = x \log 10 = \log 10 \log_{10} a) \end{split}$$

$(P. 372 a^+, a^-)$

$$a^+ = Max \{a, 0\}$$

$$\begin{cases} a \leq 0 \text{ is bit } a^+ = 0 \\ a > 0 \text{ is bit } a^+ = a \end{cases} \Rightarrow 0 \leq a^+ \leq |a|$$

$$a^- = Max \{-a, 0\}$$

$$\begin{cases} a \ge 0 \text{ filt } a^- = 0 \\ a < 0 \text{ filt } a^- = -a \end{cases} \Rightarrow 0 \le a^- \le |a|$$

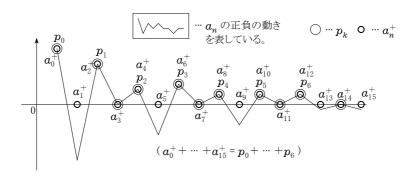
$$\begin{cases} a < 0 \text{ のとき } a^+ - a^- = 0 - (-a) = a \\ a = 0 \text{ のとき } a^+ - a^- = 0 - 0 = a \\ a > 0 \text{ のとき } a^+ - a^- = a - 0 = a \end{cases} \Rightarrow a = a^+ - a^-$$

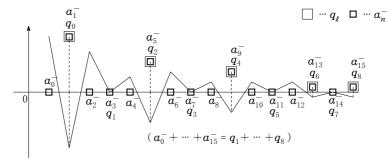
$$\begin{cases} a < 0 \text{ のとき } a^+ + a^- = 0 + (-a) = -a \\ a = 0 \text{ のとき } a^+ + a^- = 0 + 0 = a \\ a > 0 \text{ のとき } a^+ + a^- = a + 0 = a \end{cases} \Rightarrow |a| = a^+ - a^-$$

$$a^{+} = \frac{|a| + a}{2} , a^{-} = \frac{|a| - a}{2}$$

$$\text{for } \sum_{n=0}^{\infty} a_{n} = \sum_{n=0}^{\infty} (a_{n}^{+} - a_{n}^{-}) = p - q$$

(P. 373 定理 3. 4の準備)





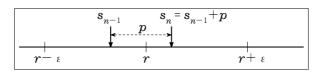
 $\sum a_n$ が条件収束するとは、 $\sum a_n$ 自身は収束するが、 $\sum |a_n|$ は発散することであったので、 $|a_n|=2a_n^+-a_n$ から $\sum a_n^+=+\infty$ であり、また同様に $|a_n|=2a_n^--a_n$ から $\sum a_n^-=+\infty$ である。また、0 の項がないだけなので $\sum\limits_{k=0}^\infty p_k=\sum\limits_{n=0}^\infty a_n^+=+\infty$ 同様に $\sum\limits_{k=0}^\infty q_j=\sum\limits_{n=0}^\infty a_n^-=+\infty$ となる。

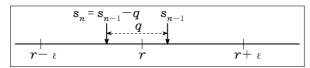
$$\begin{array}{l} \text{(P. 374 } \mathbf{s_n} > \mathbf{m} - \frac{1}{2} \text{ (20VT)} \\ \sum a_{\mathbf{k(n)}} = p_0 + \cdots + p_{n_1} - q_0 + p_{n_1+1} + \cdots + p_{n_2} - q_1 + p_{n_2+1} + \cdots + p_{n_3} - q_2 + p_{n_3+1} + \cdots \\ > 1 \end{array}$$

よって、任意のmに対し、 $\exists n_0$, $n \ge n_0$ ならば $0 \le q_n < \frac{1}{2}$ なので、十分大きな n をとり n > Max $\{n_m, n_0\}$ とすれば、 $s_n > m - \frac{1}{2}$ とすることができる。

任意の実数アに収束させたい場合は

 $\Sigma a_{k(n)} = p_0 + \cdots + p_{n_1} - q_0 \cdots - q_{m_1} + p_{n_1+1} + \cdots + p_{n_2} - q_{m_1+1} \cdots - q_{m_2} + p_{n_2+1} + \cdots$ > r < r > r < r > r < r < r < r < r < r < r < r 任意の $\varepsilon > 0$ に対して、 $\exists n_0$, $n \ge n_0$ ならば $0 \le q_n$, $p_n < \varepsilon$ なので、十分大きな n をとれば、 $r - \varepsilon < s_n < r + \varepsilon$ となり、 s_n は r に収束する。 なぜなら、 $n \ge n_0$ に対し、 s_{n-1} に p を加え、はじめて r を越えるとき、 $r - \varepsilon < s_{n-1} < r < s_{n-1} + p = s_n < r + \varepsilon$ 、 q を引いて、はじめて r より小さくなる場合は、 $r - \varepsilon < s_{n-1} - q = s_n < r < r + \varepsilon$ となるから、 $n \ge n_0$ ならば、以後 s_n は $r - \varepsilon$ と $r + \varepsilon$ の間に閉じ込められる。(p ,q を無限に加え続けることはない。なぜなら、p ,p q q q q だからである。) 下図参照





(P. 374 定理3.4系)

a) \Rightarrow b) $\sum a_n = \sum (x_n + i \ y_n) = a = x + i y$ とする。 $|x_n| \le |a_n|$, $|y_n| \le |a_n|$ なので $\sum x_n$, $\sum y_n$ はそれぞれ絶対収束する。そこで、項の順序を変えた級数を $\sum a_{k(n)} = \sum (x_{k(n)} + i \ y_{k(n)})$ としたとき、定理3.3より、 $\sum x_{k(n)} + i \sum y_{k(n)}$ は収束し $x + i \ y$ に等しい。よって、どのように項の順序を変えても a に等しい。

b) \Rightarrow a) $\sum a_n$ はどんな順序 k(n)をとっても収束するので、 $\sum x_{k(n)}$ 、 $\sum y_{k(n)}$ も収束する。したがって、 $\sum x_n$ 、 $\sum y_n$ はどちらも絶対収束する。 $|a_n| \leq |x_n| + |y_n|$ から

 $\sum a_n$ は絶対収束する。

(P. 374 注意)

 $\sum a_n^+ = \infty$ ならば、どんな順序 k(n) をとっても、 $\sum a_{k(n)}^+ = \infty$ である。なぜなら、もし、 $\sum a_{k(n)}^+ = p$ となる順序 k(n) があったとすれば、 $\sum a_{k(n)}^+ = \sum |a_{k(n)}^+| = p$ なので定理3.3より、順序を変えた $\sum a_n^+ = p$ となり矛盾する。

同様にして、 $\sum a_n^- = \infty$ ならば、どんな順序 k(n) をとっても、 $\sum a_{k(n)}^- = \infty$ である。 つまり、III)ならば、 $p = +\infty$, $q < +\infty$ なので、どんな順序をとっても、 $\sum a_{k(n)} = \infty$ となる。また、IV)ならば、 $p < +\infty$, $q = +\infty$ なので、どんな順序をとっても $\sum a_{k(n)} = -\infty$ となる。

(P. 374 例1)

P. 373例1(3.6)は収束するが絶対収束しない例である。

そこで、
$$\sum_{n=0}^{\infty} a_n^+ = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{1}{2n+1} = \infty$$
 , $\sum_{n=0}^{\infty} a_n^- = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{1}{2n} = \infty$ になることを示す。

I 章P. 45の例4を真似し、コーシーの条件がみたされないことを示す。

$$\mathbf{s}_{2n} - \mathbf{s}_{n} = \frac{1}{2n+3} + \frac{1}{2n+5} + \cdots + \frac{1}{2(2n)+1} > \frac{n}{2(2n)+1} > \frac{n}{4n+n} = \frac{1}{5}$$

同様に、
$$\mathbf{s}_n = \sum_{k=0}^n \frac{1}{2k}$$
 とする。 $\mathbf{s}_{2n} = \sum_{k=0}^{2n} \frac{1}{2k}$ なので、

$$\mathbf{s}_{2n} - \mathbf{s}_n = \frac{1}{2(n+1)} + \dots + \frac{1}{4n} > \frac{n}{4n} = \frac{1}{4}$$

また $\sum_{n=1}^{\infty} |a_n| = \sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{n}$ なので、I 章P. 45の例4から絶対収束しない。しかし、I 章

P.
$$45$$
の例 5 から $\sum\limits_{n=1}^{\infty}a_n$ は収束し

$$1-\frac{1}{2}+\frac{1}{3}-\frac{1}{4}+\frac{1}{5}-\frac{1}{6}+\frac{1}{7}-\frac{1}{8}+\frac{1}{9}-\frac{1}{10}+\cdots = \log 2$$
 となる。つまり、条件収束する。

上の級数の項の順番を変更して、正の項をp個、負の項をq個ずつ交互に並べた級数の和をsとすれば、次の様になる。

$$s = log 2 + \frac{1}{2}log(\frac{p}{q})$$

(証明)(小平邦彦 解析入門より)

P. 370(2.4)から、オイラー定数 C を使えば

$$1 + \frac{1}{2} + \frac{1}{3} + \frac{1}{4} + \dots + \frac{1}{n} = log \ n + C + o(n) \quad (n \to +\infty)$$

と書ける。

$$P_n = 1 + \frac{1}{3} + \frac{1}{5} + \dots + \frac{1}{2n-1}$$
 (n 項ある)

$$\mathbf{Q}_n = \frac{1}{2} + \frac{1}{4} + \frac{1}{6} + \dots + \frac{1}{2n} = \frac{1}{2} (1 + \frac{1}{2} + \frac{1}{3} + \dots + \frac{1}{n})$$
 (n 項ある)

とおけば

$$P_n + Q_n = log(2n) + C + o(n)$$

$$Q_n = \frac{1}{2} \log n + \frac{1}{2} C + o(n)$$

$$P_n = log (2n) + C + o(n) - \frac{1}{2}log n - \frac{1}{2}C - o(n)$$

=
$$\log 2 + \frac{1}{2}C + \frac{1}{2}\log n + o(n)$$

したがって

$$P_{np} - Q_{nq} = log \ 2 + \frac{1}{2}C + \frac{1}{2}log \ np + o(n) - \frac{1}{2}log \ nq - \frac{1}{2}C - o(n)$$

=
$$log 2 + \frac{1}{2}log(\frac{np}{nq}) + o(n)$$

=
$$log 2 + \frac{1}{2}log(\frac{p}{q}) + o(n)$$

となり、ゆえに、
$$\lim_{n \to +\infty} (P_{np} - Q_{nq}) = \log 2 + \frac{1}{2} \log(\frac{p}{q})$$
 となる。

項の順番を変更して、正の項を p 個、負の項を q 個ずつ交互に並べた級数は

$$1 + \frac{1}{3} + \dots + \frac{1}{2p-1} - \frac{1}{2} - \frac{1}{4} - \dots - \frac{1}{2q} + \frac{1}{2p+1} + \dots + \frac{1}{4p-1} - \frac{1}{2q+2} - \dots$$

その和
$$s$$
 は、その $np+nq$ 項までの部分和 s_{np+nq} = $P_{np}-Q_{nq}$ となるので

$$\mathbf{s} = \log 2 + \frac{1}{2} \log(\frac{\mathbf{p}}{\mathbf{q}})$$
 Etas.

(P. 376 定理4.1)

$$\begin{array}{c} \mathbf{s}_{2n+1} = p_0 - p_1 + p_2 - p_3 + \cdots + p_{2n-2} - p_{2n-1} + p_{2n} - p_{2n+1} \\ \mathbf{s}_{2n-1} = p_0 - p_1 + p_2 - p_3 + \cdots + p_{2n-2} - p_{2n-1} \\ p_{2n} - p_{2n+1} > 0 \text{ is of } \mathbf{s}_{2n+1} \\ \mathbf{s}_{2n} = p_0 - p_1 + p_2 - p_3 + \cdots - p_{2n-3} + p_{2n-2} - p_{2n-1} + p_{2n} \\ = p_0 - (p_1 - p_2) - (p_3 - p_4) - \cdots - (p_{2n-3} - p_{2n-2}) \\ \mathbf{s}_{2n-2} = p_0 - (p_1 - p_2) - (p_3 - p_4) - \cdots - (p_{2n-3} - p_{2n-2}) \end{array}$$

$$p_{2n-1}-p_{2n}>0$$
なので $s_{2n-2} \ge s_{2n}$

(注意) $0 \le \mathbf{s} - \mathbf{s}_{2n} \le p_{2n+1}$ 、 $0 \le \mathbf{s}_{2n-1} - \mathbf{s} \le p_{2n}$ なので、偶数であっても奇数であっても、任意の $n \in N$ に対し $|\mathbf{s} - \mathbf{s}_n| \le p_{n+1}$ となる。

(P. 376 例1)

 $1-\frac{1}{2^2}+\frac{1}{3^2}-\frac{1}{4^2}+\cdots(-1)^n\frac{1}{n^2}+\cdots$ は定理4. 1より収束するので、その和をs とおく。IV章P. 315(13, 29)と(13, 30)から

$$\frac{\pi^2}{8} = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{1}{(2n+1)^2}$$
 , $\frac{\pi^2}{6} = \sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{n^2}$ それぞれ絶対収束するので項の順番を変えても和は変わらない。また、(13. 30)から、 $1 - \frac{1}{2^2} + \frac{1}{3^2} - \cdots + (-1)^n \frac{1}{n^2} + \cdots$ も

絶対収束する。よって、項の順番を変えてもよいので次の等式が成り立つ

$$\frac{\pi^2}{8} = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{1}{(2n+1)^2} = s + \frac{1}{4} \sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{n^2}$$

(P. 377 アーベルの変形)

まずは練習(
$$S(n,m)\neq p_{n+1}a_{n+1}+\cdots$$
 に注意、 p_0 を消さないためである。)
$$S(2,6)=p_2a_2+p_3a_3+p_4a_4+p_5a_5+p_6a_6$$

$$=(s_2-s_1)p_2+(s_3-s_2)p_3+(s_4-s_3)p_4+(s_5-s_4)p_5+(s_6-s_5)p_6$$

(証明)

$$S(n,m) = s_n(p_n - p_{n+1}) + s_{n+1}(p_{n+1} - p_{n+2}) + s_{n+2}(p_{n+2} - p_{n+3}) + \dots + s_{m-1}(p_{m-1} - p_m) - s_{n-1}p_n + s_mp_m$$

なので、仮定(i)から

$$|S(n,m)| \leq 2C|p_n|$$
 ($\forall n, m \in N, m \geq n, \forall x \in A$)

よって、
$$\|f\|_A = \sup_{x \in A} |f(x)|$$
なので、上限の定義(最小上界)から

 $\parallel \mathbf{S}(\mathbf{n},\mathbf{m}) \parallel \leq 2\mathbf{C} \parallel \mathbf{p}_n \parallel \geq 2\mathbf{C} \parallel \mathbf{p}_n \parallel \geq 2\mathbf{C} \parallel \mathbf{p}_n \parallel \geq 2\mathbf{C} \parallel \mathbf{p}_n \parallel \leq 2\mathbf{C} \parallel \leq 2\mathbf{$

したがって、仮定a)が成り立つとき、 $\left(p_n\right)_{n\in\mathbb{N}}$ は A 上一様に 0 に収束するので一様コーシー条件のb)から、任意の $\frac{\varepsilon}{2C}>0$ に対し $n_0>0$ が存在し、 $n\geq n_0$ ならば $\|p_n\|<\frac{\varepsilon}{2C}$ とすることができる。

したがって、 $m \ge n \ge n_0$ ならば、 $\|S(n,m)\|$ 〈 ϵ とすることができる。よって一様コーシー条件のa)から $\sum p_n a_n$ は A 上一様収束することがわかる。

仮定b) がみたされるときは、一様コーシー条件より、任意の $\epsilon>0$ に対し、ある n_0 $\in N$ が存在し、 $m \ge n \ge n_0$ のとき、次の不等式が成り立つ。

いま、 $\sigma_n(x) = \sum\limits_{k=n_0}^n a_k(x)$ とおけば、(4.6) より $\|\sigma_n(x)\| < \|\sum\limits_{k=n_0}^n a_k(x)\| < \varepsilon$ ($\forall n$) を n0 だから n2 を n3 を n4 を n5 を n5 を n6 を n6 を n7 を n8 を n9 を n

$$| \sum_{k=n}^{m} p_{k}(x) a_{k}(x) | = | p_{n}(x) a_{n}(x) + p_{n+1}(x) a_{n+1}(x) + \dots + p_{m-1}(x) a_{m-1}(x) + p_{m}(x) a_{m}(x) |$$

$$a_{m}(x) |$$

$$= | \{ \sigma_n(x) - \sigma_{n-1}(x) \} p_n(x) + \{ \sigma_{n+1}(x) - \sigma_n(x) \} p_{n+1}(x) + \{ \sigma_{n+2}(x) - \sigma_{n+1}(x) \} p_{n+2}(x) + \dots + \{ \sigma_n(x) - \sigma_{m-1}(x) \} p_m(x) |$$

$$= | \{ p_n(x) - p_{n+1}(x) \} \sigma_n(x) + \{ p_{n+1}(x) - p_{n+2}(x) \} \sigma_{n+1}(x) + \{ p_{n+2}(x) - p_{n+3}(x) \}$$

$$\sigma_{n+2}(x) + \dots + \{ p_{m-1}(x) - p_m(x) \} \sigma_{m-1}(x) - \sigma_{n-1}(x) p_n(x) + \sigma_m(x) p_m(x) |$$

$$= \big| \sum_{k=n}^{m-1} \{ \boldsymbol{p}_k(\boldsymbol{x}) - \boldsymbol{p}_{k+1}(\boldsymbol{x}) \} \; \sigma_k(\boldsymbol{x}) - \; \boldsymbol{\sigma}_{n-1}(\boldsymbol{x}) \boldsymbol{p}_n(\boldsymbol{x}) + \; \boldsymbol{\sigma}_m(\boldsymbol{x}) \boldsymbol{p}_m(\boldsymbol{x}) \; \big|$$

仮定(ii)から、単調減少の非負数列であるので

$$\leq \sum_{k=n}^{m-1} \{p_k(x) - p_{k+1}(x)\} \ \epsilon \ + | \ p_n(x) \ | \ \epsilon \ + | \ p_m(x) \ | \ \epsilon \ (\ m \geq n > n - 1 \geq n_0)$$

$$= \{ \ p_n(x) - p_{n+1}(x) + p_{n+1}(x) - p_{n+2}(x) + p_{n+2}(x) - p_{n+3}(x) + \dots + p_{m-1}(x) - p_m(x) + p_n(x) + p_m(x) \} \ \epsilon = 2 \ \epsilon \ | \ p_n(x) \ | \leq 2 \ \epsilon \ | \ p_0(x) \ |$$
 がすべての $x \in A$ に対し成り立つ。

したがって

 $m \ge n > n_0$ $\Rightarrow \| S(n,m) \| \le 2 \varepsilon \| p_0(x) \|$ であり、 ε は任意だからやはり $\sum p_n a_n$ は一様コーシー条件a)をみたし、前半の証明と同様にして、A 上一様収束する。

(P. 378 例2)

 $\sum_{n=1}^{\infty} \frac{\cos nx}{n}$, $\sum_{n=1}^{\infty} \frac{\sin nx}{n}$ は $I = (0, 2\pi)$ で各点収束し、任意の $\pi > \delta > 0$ に対し $(\delta, 2\pi - \delta) = I_s$ で一様収束する。

(証明) $p_n = \frac{1}{n}$ とすれば、定理4.3の仮定 ii)とa)をみたす。よって、仮定 i)が成り立つことを示せばよい。オイラーの公式により

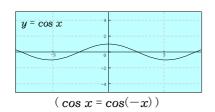
(4. 7)
$$\sum_{m=1}^{n} \cos mx + i \sum_{m=1}^{n} \sin mx = \sum_{m=1}^{n} e^{imx}$$

だから、この式の右辺が任意の $\pi>\delta>0$ に対し、 $(\delta,2\pi-\delta)=I_\delta$ 上で一様有界であることを示す。

$$\begin{array}{c} \text{Zec} \, , \sum\limits_{m=1}^{n} a^m = \frac{a^{n+1} - a}{a-1} \, \text{ for } \, ; \, | \, \sum\limits_{m=1}^{n} e^{imx} \, | \, = \, | \, \frac{e^{ix(n+1)} - e^{ix}}{e^{ix} - 1} \, | \\ \\ e^{ix} e^{\frac{inx}{2}} (e^{\frac{inx}{2}} - \frac{1}{\frac{inx}{2}}) \\ = | \, \frac{e^{\frac{inx}{2}} (e^{\frac{inx}{2}} - \frac{1}{\frac{ix}{2}})}{e^{\frac{ix}{2}}} \, | \, = \, | \, \frac{e^{\frac{inx}{2}} - e^{-\frac{inx}{2}}}{e^{\frac{ix}{2}} - e^{-\frac{ix}{2}}} \, | \, \\ & (\, | \, e^{ix} \, | \, = \, 1 \, \, \text{ for } h \text{ is } h \text{$$

また、
$$e^{\frac{inx}{2}} - e^{-\frac{inx}{2}} = \cos\frac{nx}{2} + i\sin\frac{nx}{2} - \cos(-\frac{nx}{2}) - i\sin(-\frac{nx}{2})$$

$$= 2i\sin\frac{nx}{2} \quad 同様にして、 $e^{\frac{ix}{2}} - e^{-\frac{ix}{2}} = 2i\sin\frac{x}{2}$ なので$$

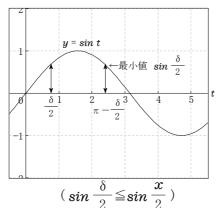


$$y = \sin x$$

$$(\sin(-x) = -\sin x)$$

$$\left|\sum_{m=1}^{n} e^{imx}\right| = \frac{\left|\sin\frac{nx}{2}\right|}{\left|\sin\frac{x}{2}\right|} \leq \frac{1}{\left|\sin\frac{x}{2}\right|} \leq \frac{1}{\sin\frac{\delta}{2}} \qquad (\forall x \in (\delta, 2\pi - \delta), \forall x \in (\delta$$

なぜなら、x \in (δ , 2π - δ)ならば、 $t=\frac{x}{2}$ \in ($\frac{\delta}{2}$, π - $\frac{\delta}{2}$)なので



(4.7)
$$\sum_{m=1}^{n} \cos mx + i \sum_{m=1}^{n} \sin mx = \sum_{m=1}^{n} e^{imx} \quad \text{then}$$

$$|\sum_{m=1}^{n}\cos mx+i\sum_{m=1}^{n}\sin mx|=|\sum_{m=1}^{n}e^{imx}|\leq \frac{1}{\sin \frac{\delta}{2}}$$
 Ets.

ここで、
$$|a| < |a+ib|$$
 , $|b| < |a+ib|$ なので

$$|\sum_{m=1}^{n}\cos mx| \leq \frac{1}{\sin \frac{\delta}{2}}$$
, $|\sum_{m=1}^{n}\sin mx| \leq \frac{1}{\sin \frac{\delta}{2}}$

$$\|\sum_{m=1}^{n}\cos mx\| \leq \frac{1}{\sin \frac{\delta}{2}}, \|\sum_{m=1}^{n}\sin mx\| \leq \frac{1}{\sin \frac{\delta}{2}} \quad (\forall n \in \mathbb{N})$$

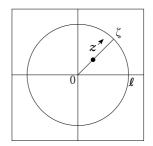
であり、 I_δ 上一様有界となる。 $\delta>0$ は任意だから、 δ を限りなく小さくすれば、任意の x に対して、 $x \in I_\delta \subset (0,2\pi)$ とすることができるので、P.305 命題13. 2より各点収束する。

(P. 378 定理4.4の拡張(アーベルの連続性定理))

収束半径が l>0 であるような整級数 $f(z)=\sum_{n=0}^{\infty}a_nz^n$ と収束円周上の点 $\zeta(|\zeta|=l)$ に対して、 $\rho=\sum_{n=0}^{\infty}a_n\zeta^n$ が収束すると仮定する。このとき、原点と ζ とを結ぶ半径に沿って、 $z\to\zeta$ とすると $f(z)\to\rho$ が成り立つ。

(証明)
$$z=\zeta t$$
 (t \in $I=[0,1]$) とおくと、 $g(t)=f(\zeta t)=\sum\limits_{n=0}^{\infty}a_{n}\zeta^{n}t^{n}$ は t に関す

る級数とみて $\sum_{n=0}^{\infty} a_n \zeta^n$ が収束する。 $a_n \zeta^n$ は複素数でもよいので、アーベルの定理より右辺は $0 \le t \le 1$ において一様収束し、 $t \to 1-0$ のとき $g(t) \to \rho$ となる。定理4. 4系は原点 $0 \ge a$ にずらしただけである。



(P. 379 例3)

例2の級数の和 $c=\sum\limits_{n=1}^{\infty}\frac{\cos n\ \theta}{n}$, $s=\sum\limits_{n=1}^{\infty}\frac{\sin n\ \theta}{n}$ を求める。 いまz の整級数

(4.8)
$$c(z) = \sum_{n=1}^{\infty} \frac{\cos n \theta}{n} z^n \quad , \quad s(z) = \sum_{n=1}^{\infty} \frac{\sin n \theta}{n} z^n$$

を考えると、 $\theta \in (0, 2\pi)$ ならば例2により、これらの級数は z = 1 で収束する。したがって、 \mathbf{III} 章定理2. 1より、これらの収束半径は共に ≥ 1 である。

そこで、
$$|z|$$
 < 1 で (4.8) は収束し、 \mathbf{III} 章 (4.18) の $-Log(1-z) = \sum_{n=1}^{\infty} \frac{z^n}{n}$ から

$$c(z)+i s(z) = \sum_{n=1}^{\infty} \frac{\cos n \theta}{n} z^{n}+i \sum_{n=1}^{\infty} \frac{\sin n \theta}{n} z^{n} = \sum_{n=1}^{\infty} \left(\frac{e^{in\theta}}{n} z^{n}\right) = \sum_{n=1}^{\infty} \frac{(e^{i\theta}z)^{n}}{n}$$

$$= -Log(1-e^{i\theta}z)$$

となる。そこで特に、 $z = x \in (-1, 1)$ のとき、III章定義2(4.13) Log z = log |z|

$$+i\theta$$
 より (注意 $1-e^{i\theta}z$ $\{z\in R\mid z\leq 0\}$ 下図参照)

$$c(x)+i s(x) = -log |1-xe^{i\theta}|-i Arctan(\frac{x sin \theta}{x cos \theta-1})$$

となるから

$$c(x) = -\frac{1}{2} log(1 - 2x cos \theta + x^2)$$

$$\mathbf{s}(x) = Arctan(\frac{x \sin \theta}{1 - x \cos \theta}) \quad (-1 < x < 1, 0 < \theta < 2\pi)$$

を得る。なぜなら

$$1-xe^{i\theta}=1-x\cos\theta-ix\sin\theta$$

$$|1-xe^{i\theta}|^2 = (1-x\cos\theta)^2 + x^2\sin^2\theta = 1-2x\cos\theta + x^2$$

$$tan \theta = \frac{\sin \theta}{\cos \theta} = x$$

$$tan(-\theta) = \frac{-\sin\theta}{\cos\theta} = -x$$

$$-tan(-\theta) = tan \theta$$

$$Arctan(-x) = -Arctan x$$

$$tan(\pi + \theta') = tan \theta'$$

$$\begin{array}{c|c}
 & xe^{i\theta} \\
 & 1-xe^{i\theta} \\
 & -x\sin\theta \\
\hline
 & 1 \\
 & x\cos\theta \\
\hline
 & 1
\end{array}$$

$$-Arctan(rac{x\sin heta}{x\cos heta-1})$$
 = $Arctan(rac{x\sin heta}{1-x\cos heta})$ = $\; m{\theta} \;$ 、であるからである。

さて、例2により、 $0<\theta<2\pi$ のとき、アーベルの連続性定理が c(x)、s(x) に適用できるから

(4.9)
$$c = \sum_{n=1}^{\infty} \frac{\cos n \theta}{n} = \lim_{x \to 1-0} c(x) = -\frac{1}{2} log\{2(1-\cos \theta)\} = -log(2\sin \frac{\theta}{2})$$

$$(4.10) s = \sum_{n=1}^{\infty} \frac{\sin n \theta}{n} = \lim_{x \to 1-0} s(x) = Arctan(\frac{\sin \theta}{1 - \cos \theta}) = \frac{\pi - \theta}{2}$$

$$0 < \theta < 2\pi \rightarrow -2\pi < -\theta < 0 \rightarrow -\pi < \pi - \theta < \pi \rightarrow (-\frac{\pi}{2} < \frac{\pi - \theta}{2} < \frac{\pi}{2})$$

ここで、三角関数の復習

$$1-\cos\theta=1-\cos(\frac{\theta}{2}+\frac{\theta}{2})=1-(\cos^2\frac{\theta}{2}-\sin^2\frac{\theta}{2})=2\sin^2\frac{\theta}{2}$$

また、
$$\sin\theta = \sin(\frac{\theta}{2} + \frac{\theta}{2}) = 2\sin(\frac{\theta}{2}\cos(\frac{\theta}{2}))$$
 なので

$$\frac{\sin \theta}{1 - \cos \theta} = \frac{2\sin \frac{\theta}{2}\cos \frac{\theta}{2}}{2\sin^2 \frac{\theta}{2}} = \cot \frac{\theta}{2} = \tan(\frac{\pi}{2} - \frac{\theta}{2})$$

となるからである。 (
$$tan b = \frac{m}{n} = tan(\frac{\pi}{2} - a) = cot a$$
)

 $\theta=0$, 2π のとき c は $\sum \frac{1}{n}$ なので発散し、s は各項が0だから、和は0である。 また $s(x)=Arctan(\frac{x\sin\theta}{1-x\cos\theta})$ は $\theta=0$, 2π で連続でないから $[0,2\pi]$ で収束はするが一様収束はしない。

(P. 380 例4の補足)

①
$$\lim_{n\to+\infty} a_n = \ell$$
 ならば、 $\lim_{n\to+\infty} |a_n| = |\ell|$ である。

(証明)仮定から、任意の $\epsilon > 0$ に対し、ある $n_0 \in N$ が存在し、 $n > n_0$ ならば

$$|\,|\,a_n^{}|-|\,\mathbf{\ell}\,|\,|\!\leq\!|\,a_n^{}-\mathbf{\ell}\,|$$
く ϵ (P. 4 命題1. 2に追加)参照

②2つの正項級数
$$\sum\limits_{n=0}^{\infty}a_n$$
 , $\sum\limits_{n=0}^{\infty}b_n$ に対し、 $\lim\limits_{n\to+\infty}\frac{a_n}{b_n}=1$ であるとき、つまり、 $a_n{\sim}b_n$ ならば、 $\sum\limits_{n=0}^{\infty}a_n$, $\sum\limits_{n=0}^{\infty}b_n$ は同時に収束、発散する。

(証明)
$$\lim_{n\to+\infty}\frac{a_n}{b_n}=1$$
 なので、任意の $\epsilon>0$ に対し、ある $n_0\in N$ が存在し、 $n>n_0$

ならば
$$|\frac{a_n}{b_n}-1|$$
 < ε とすることができる。

つまり、
$$1-\varepsilon < \frac{a_n}{b_n} < 1+\varepsilon \rightarrow (1-\varepsilon)b_n < a_n < (1+\varepsilon)b_n$$
 となる。

よって、正項級数 $\sum\limits_{n=0}^{\infty} b_n$ が収束すれば a_n < $(1+\epsilon)b_n$ なので、P. 46定理5. 5(

比較定理)から、 $\sum\limits_{n=0}^{\infty}a_n$ も収束し、 $(1-\epsilon)b_n$ $< a_n$ から発散することもわかる。

 a_n , b_n の立場を入れかえれば、「同時に」がわかる。

③
$$\lim_{n\to+\infty} \frac{a_n}{b_n}$$
 = 1 であるとき、つまり、 $a_n\sim b_n$ のとき、 $b_n\neq 0$ ($n\to+\infty$)ならば $a_n\neq 0$ ($n\to+\infty$)である。

(証明)
$$\lim_{n\to +\infty} \frac{a_n}{b_n} = 1$$
 なので、任意の $\epsilon > 0$ に対し、ある $n_0 \in N$ が存在し、 $n > n_0$

ならば
$$|\frac{a_n}{b_n}-1|$$
 〈 ϵ とすることができる。 つまり、 $1-\epsilon$ 〈 $\frac{a_n}{b_n}$ 〈 $1+\epsilon$ → $(1-\epsilon)b_n$ 〈 a_n 〈 $(1+\epsilon)b_n$ か $(1-\epsilon)b_n$ 〉 a_n 〉 $(1+\epsilon)b_n$ なので、いずれにしても $a_n\neq 0$ である。

(P. 380 例4)

(4.11)
$$F(a, b; c; z) = \sum_{n=1}^{\infty} \frac{a(a+1)\cdots(a+n-1)b(b+1)\cdots(b+n-1)}{c(c+1)\cdots(c+n-1)} \frac{z^n}{n!}$$

は、a または b が負の整数($-m \le 0$) のとき m 次多項式である。

$$F(a,b;c;z) = \frac{ab}{c}z + \frac{a(a+1)b(b+1)}{c(c+1)} \frac{z^2}{2!} + \frac{a(a+1)(a+2)b(b+1)(b+2)}{c(c+1)(c+2)} \frac{z^3}{3!}$$

$$a(a+1)(a+2)(a+3)b(b+1)(b+2)(b+3) z^3$$

$$+\frac{a(a+1)(a+2)(a+3)b(b+1)(b+2)(b+3)}{c(c+1)(c+2)(c+3)}\frac{z^3}{3!}+\cdots$$

(例)
$$a = -3$$
 とすれば、 $(a+3) = 0$ となり

$$F(a,b;c;z) = \frac{ab}{c}z + \frac{a(a+1)b(b+1)}{c(c+1)}\frac{z^2}{2} + \frac{a(a+1)(a+2)b(b+1)(b+2)}{c(c+1)(c+2)}\frac{z^3}{6}$$
 c が負の整数(- m ≤0) のとき分母がのとなり、 $z^n(n > m)$ の係数が定義できない。

これら以外の場合の z^n の係数を a_n とおく。

$$\begin{aligned} &(4.12) \mid \frac{a_{n+1}}{a_n} \mid \\ &= \mid \frac{a \cdots (a+n)b \cdots (b+n)}{c \cdots (c+n)} \frac{1}{(n+1)!} \frac{c \cdots (c+n-1)}{a \cdots (a+n-1)b \cdots (b+n-1)} \frac{n!}{1} \mid \\ &= \mid \frac{(a+n)(b+n)}{(c+n)(n+1)} \mid \to 1 \ (n \to +\infty) \end{aligned}$$

であるから収束半径は1(P. 169 ${
m III}$ 章定理2. 2)である。また、a , b , c \in R のとき

P. 332命題15. 3から

$$\Gamma(a+n) = (a+n-1)(a+n-2)\cdots(a+1)a\Gamma(a)$$
 from

$$\frac{\Gamma(a+n)}{\Gamma(a)} = (a+n-1)(a+n-2)\cdots(a+1)a$$

また、P. 296定理12. 2から $\Gamma(n+1) = n!$ なので

$$a_{n} = \frac{\Gamma(a+n)\Gamma(b+n)\Gamma(c)}{\Gamma(a)\Gamma(b)\Gamma(c+n)\Gamma(c+n)\Gamma(n+1)} = \frac{\Gamma(a+n)\Gamma(b+n)\Gamma(c)}{\Gamma(a)\Gamma(b)\Gamma(c+n)\Gamma(n)n}$$

$$= \frac{\Gamma(c)}{\Gamma(a)\Gamma(b)} \cdot \frac{\Gamma(a+n)}{\Gamma(n)} \cdot \frac{\Gamma(b+n)}{\Gamma(n)} \cdot \frac{\Gamma(n)}{\Gamma(c+n)} \cdot \frac{1}{n}$$

ここで、P. 340例3から、 $\frac{\Gamma(x+n)}{\Gamma(n)}$ ~ $n^x(n\to+\infty)$ なので

$$a_n \sim \frac{\Gamma(c)}{\Gamma(a)\Gamma(b)} n^{a+b-c-1} (n \to +\infty)$$
 となる。

そこで

$$\sum_{n=0}^{\infty} b_n z^n = \sum_{n=0}^{\infty} \left(\frac{\Gamma(c)}{\Gamma(a)\Gamma(b)} n^{a+b-c-1}\right) z^n = \frac{\Gamma(c)}{\Gamma(a)\Gamma(b)} \sum_{n=0}^{\infty} n^{a+b-c-1} z^n$$

なる整級数を考える。

 $i\)a+b-c<0$ ならば a+b-c-1<-1 なので (4.11) は単位**円周 U 上**のすべての点 z で絶対収束する。なぜなら、P. 369定理2. 5から $\sum\limits_{n=1}^{\infty}\frac{1}{n^s}$ は s>1 のとき収束し、(上の補足①)より

$$\lim_{n \to +\infty} \frac{a_n}{\frac{\Gamma(c)}{\Gamma(a)\Gamma(b)} n^{a+b-c-1}} = 1 \quad \text{for } \lim_{n \to +\infty} \frac{|a_n|}{|\frac{\Gamma(c)}{\Gamma(a)\Gamma(b)} n^{a+b-c-1}|} = 1$$

である。よって、(上の補足②)より、

$$\sum\limits_{n=1}^{\infty} \mid b_n z^n \mid = \sum\limits_{n=1}^{\infty} \mid b_n \mid \mid z^n \mid = \sum\limits_{n=1}^{\infty} \mid b_n \mid$$
なので絶対収束する。

ii) a+b-c \geq 1 ならば a+b-c-1 \geq 0 なので、単位円周 U 上のすべての点 z で(4.11) は(上の補足③) から $b_n = \frac{\Gamma(c)}{\Gamma(a)\Gamma(b)} n^{a+b-c-1} \to 0$ $(n\to +\infty)$ とならないので、P. 45定理5、1系より発散する。

iii) $1>a+b-c\ge 0$ のとき、(4. 11) は z=1 以外の単位円周 U 上の点で収束 し、z=1 で発散する。 なぜなら、z=1 ならば $0>a+b-c-1\ge -1$ なので

P. 369定理2. 5から $\sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{n^s}$ は発散し、(補足②)より発散することがわかる。また $z \neq 1$, |z| = 1 ならば $|\sum_{n=1}^{N} z^N| = |\frac{1-z^{N+1}}{1-z}| \leq \frac{2}{|1-z|}$ は有界 (z = i, N+1

が偶数の場合に分子は2)である。また

$$\frac{a_{n+1}}{a_n} = \frac{(a+n)(b+n)}{(c+n)(n+1)} = \frac{n^2 + an + bn + ab}{n^2 + nc + n + 1} = \frac{n + a + b + \frac{ab}{n}}{n + c + 1 + \frac{1}{n}}$$
 ස්ථාව

1>a+b-c ≥ 0 $\to c+1>a+b$ なので、ある n_0 $\in N$ が存在して、n $\geq n_0$ となる すべての n に対して $(c+1-(a+b)) > \frac{ab-1}{n}$ となるように n_0 をとればよい。) $0 < \frac{a_{n+1}}{a} < 1$

が成り立つ。そこで、 $n \ge n_0$ のとき a_n の符号は一定で (a_n) または $(-a_n)$ が 単調減少の正数列となる。そして、0 > a+b-c-1 なので、(4.13)より $a_n \to 0$ $(n \to +\infty)$ であるから $\sum\limits_{n=1}^\infty a_n z^n$ 、 $-\sum\limits_{n=1}^\infty a_n z^n$ に対しアーベルの定理(定理4. 2) が 適用され、収束することがわかる。

(P. 383 例1(アイゼンシュタン級数))

 $N_0^2 = N^2 - \{(0,0)\}$ を添字集合とする。アイゼンシュタン級数

(5.7)
$$\sum_{(m,n)\neq 0} \frac{1}{(m^2+n^2)^s}$$

は、s>1 のとき収束、 $s\leq 1$ のとき発散する。

(証明) N_o^2 の F 近似列として

$$m{F}_k$$
 = { ($m{m}$, $m{n}$) \in $m{N}_0^2$ | $0 \leq m{m} \leq m{k}$, $0 \leq m{n} \leq m{k}$, ($m{m}$, $m{n}$) eq (0 , 0) } をとる。

 F_k の元の個数は $(k+1)^2-1$ であるから

$$B_k = F_k - F_{k-1}$$
 の元の個数は

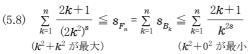
$$(k+1)^2-1-(k^2-1)$$

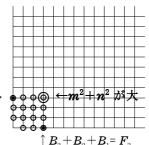
= 2k + 1

である。



また、任意の $n \ge 1$ に対し





である。したがって、s>1 ならば $\zeta(s)=\sum\limits_{n=1}^{\infty}\frac{1}{n^s}$ は収束するので、2s-1>1 に注意すれば

$$\mathbf{s}_{F_n} \leqq \sum_{k=1}^n \frac{2k+1}{k^{2s}} = \sum_{k=1}^n \frac{2k}{k^{2s}} + \sum_{k=1}^n \frac{1}{k^{2s}} = 2 \sum_{k=1}^n \frac{1}{k^{2s-1}} + \sum_{k=1}^n \frac{1}{k^{2s}}$$

 $\leq 2 \zeta (2s-1) + \zeta (2s)$

となり、 $2\mathbf{s} > 2 > 1$ なので、数列 $(\mathbf{s}_{F_n})_{n \in \mathbb{N}}$ は上に有界だから $n \to +\infty$ のとき有限 の極限が存在する。

よって、定理5.1から(5.7)は s>1 のとき収束する。

また、 $s \le 1$ ならば、 $2s-1 \le 1$ だから、(5.8)の左の不等式によって

$$\frac{1}{2^{s-1}} \sum_{k=1}^{n} \frac{1}{k} \le \frac{1}{2^{s-1}} \sum_{k=1}^{n} \frac{1}{k^{2s-1}} \quad \{ x^{a} \le x, (x \ge 1, a \le 1) \}$$

$$=\frac{2}{2^{\mathbf{s}}}\sum_{k=1}^{n}\frac{k}{k^{2\mathbf{s}}}=\sum_{k=1}^{n}\frac{2k}{(2k^{2})^{\mathbf{s}}}<2\sum_{k=1}^{n}\frac{k}{(2k^{2})^{\mathbf{s}}}+\sum_{k=1}^{n}\frac{1}{(2k^{2})^{\mathbf{s}}}=\sum_{k=1}^{n}\frac{2k+1}{(2k^{2})^{\mathbf{s}}}\leqq\mathbf{s}_{F_{n}}$$

を得るから、 $\mathbf{s}_{F_n} \to +\infty$ $(n \to +\infty)$ である。そこでまた、定理5. 1より、 $\mathbf{s} \le 1$ ならば(5. 7) は発散することがわかる。

(P. 384 命題5.2)

この命題は定理5. 1の特別な例である。このような級数を他書では累次級数と呼んでいる。定理5. 1は上限で定義していたものを単調増加列 $(\mathbf{s}_{F_n})_{n\in \mathbb{N}}$ の極限に置き換えているところに利点がある。また

$$\sum\limits_{m=0}^{p}\sum\limits_{m=0}^{q}a_{m,n}\leq s$$

「ここで $q\to\infty$ とした後、 $p\to\infty$ として、」とあるが、p を止めておいて q を先に増加させるのであるが、 $a_{m,n}\ge 0$ であるので q についての単調増加列になり、有界なので $\sum_{m=0}^p\sum_{n=0}^\infty a_{m,n}$ の存在が保証される点に注意したい。

(P. 385 命題5.3)

(証明)このとき、 $\sum a_{mn}^{\pm}$ が収束するので、 N^2 の任意の F 近似列 $(F_n)_{n\in N}$ に対す

る部分和を \mathbf{s}_{E}^{\pm} とすれば、定理5. 1によって

$$\sum_{m,n=0}^{\infty} a_{m,n}^{\pm} = \lim_{n \to +\infty} \mathbf{s}_{F_n}^{\pm}$$

が成り立つ。

$$\sum_{m,n=0}^{\infty} a_{m,n} = \sum_{m,n=0}^{\infty} a_{m,n}^{+} - \sum_{m,n=0}^{\infty} a_{m,n}^{-} = \lim_{n \to +\infty} \mathbf{s}_{F_{n}}^{+} - \lim_{n \to +\infty} \mathbf{s}_{F_{n}}^{-} = \lim_{n \to +\infty} \mathbf{s}_{F_{n}}^{-}$$

(P. 385 定理5.4)

次の三つの級数

$$(5.15) \qquad \sum_{m,n=0}^{\infty} |a_{m,n}| \;\; , \;\; \sum_{m=0}^{\infty} \sum_{n=0}^{\infty} |a_{m,n}| \;\; , \;\; \sum_{n=0}^{\infty} \sum_{m=0}^{\infty} |a_{m,n}| \;\;$$

のうち一つが有限ならば、他の二つも有限で

(5.16)
$$\sum_{m,n=0}^{\infty} a_{m,n} = \sum_{m=0}^{\infty} \sum_{n=0}^{\infty} a_{m,n} = \sum_{n=0}^{\infty} \sum_{m=0}^{\infty} a_{m,n}$$
 (注 $a_{m,n} \ge 0$ とは限らないので 命題5. 2は使えない) が成り立つ。

(証明)前半は、 $|a_{mn}| \ge 0$ なので命題5. 2から明らかである。

$$F(k, l) = [0, k] \times [0, l] \cap N^2, F(k, k) = [0, k] \times [0, k] \cap N^2$$

= F(k) (F 近似列) とし、<math>k > p , k > q となるように $k \in N$ をとれば

$$|\sum\limits_{(m,n)\in F(k)}a_{m,n}-\sum\limits_{m=0}^{p}\sum\limits_{n=0}^{q}a_{m,n}|\leq |\sum\limits_{(m,n)\in F(k)-F(p,q)}|a_{m,n}|$$

$$\leqq \sum_{m > n} \sum_{\# \vdash l \dashv n > q} |a_{m,n}|$$

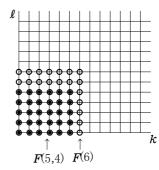
=
$$\sum_{m,n=0}^{\infty} |a_{m,n}| - \sum_{m=0}^{p} \sum_{n=0}^{q} |a_{m,n}|$$

ここで、命題5.3より、 $\sum\limits_{m,n=0}^{\infty} |a_{m,n}|$ が収束すれ

ば
$$k \rightarrow +\infty$$
 とすれば $s_F \rightarrow s$ だから

$$\mid \sum_{m,n=0}^{\infty} \, a_{m,n} - \sum_{m=0}^{p} \, \sum_{n=0}^{q} \, a_{m,n} \mid \; = \mid s - \sum_{m=0}^{p} \, \sum_{n=0}^{q} \, a_{m,n} \mid \;$$

$$\leq \sum_{m,n=0}^{\infty} |a_{m,n}| - \sum_{m=0}^{p} \sum_{n=0}^{q} |a_{m,n}|$$



 $q \to +\infty$ とした後に $p \to +\infty$ とすれば、命題5. 2から右辺は $\to 0$ となるから (5. 16) のはじめの等式が証明された。同様に、 $p \to +\infty$ とした後に $q \to +\infty$ として、第二の等式も証明される。

(P. 386 例2)

|x|<1, |y|<1 ならば $\sum x^m y^n$ は絶対収束し

(5.17)
$$\sum_{m,n=0}^{\infty} x^m y^n = \frac{1}{(1-x)(1-y)}$$

となる。

(証明) 定理5. 4より、 $\sum\limits_{m=0}^{\infty}\sum\limits_{n=0}^{\infty}\mid a_{m,n}\mid =\sum\limits_{m=0}^{\infty}\sum\limits_{n=0}^{\infty}\mid x^{m}\mid\mid y^{n}\mid$ が収束し

$$\sum\limits_{m=0}^{\infty}\sum\limits_{n=0}^{\infty}\mid x^{m}\mid\mid y^{n}\mid =\sum\limits_{m=0}^{\infty}\frac{\mid x^{m}\mid}{1-\mid y\mid} = \frac{1}{(1-\mid x\mid)(1-\mid y\mid)}$$
 となるから、(5. 17)は絶対

収束し、
$$\sum\limits_{m,n=0}^{\infty}x^{m}y^{n}=\sum\limits_{m=0}^{\infty}\sum\limits_{n=0}^{\infty}x^{m}y^{n}=\sum\limits_{m=0}^{\infty}\frac{x^{m}}{1-y}=\frac{1}{(1-x)(1-y)}$$
 となる。

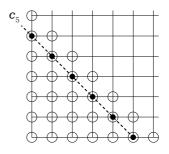
(P. 386 例3)

$$c_k = \sum_{m+n=k} a_m b_n$$

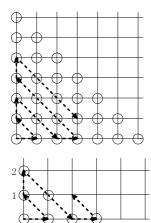
$$c_0 = a_0 b_0$$

$$\boldsymbol{c}_1 = \boldsymbol{a}_0 \boldsymbol{b}_1 + \boldsymbol{a}_1 \boldsymbol{b}_0$$

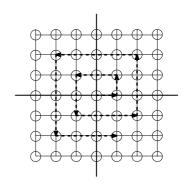
$$c_5 = a_0 b_5 + a_1 b_4 + a_2 b_3 + a_3 b_2 + a_4 b_1 + a_5 b_0$$



(P. 386 一列化の例)



(0,0) (1,0) (0,1) (0,2) (1,1) (2,0)



◎ k 重級数になっても、順に一列化していけばできるはずである。

$(P.387 定理5.5 F(k) = \phi([0,k] \cap N^2) は N^2 の F 近似列)$

 $i)[0,0]\subset[0,1]\subset[0,2]\subset\cdots\subset[0,k]$ なので明らかである。

ii)任意のFに対し、 ϕ が全単射であることから任意の(m,n) $\in F$ に対し(m,n) = $\phi(k)$ となる $k \in N$ が存在する。また、F は有限部分集合なので、そのようなk のなかで最大なものがある。それをつかえば i)が成り立つので $F \in F(k)$ とすることができる。

(P. 389 定理6.1)

① なぜ $|p_n| > M > 0$ となる M が存在するか。 すべての n で $a_n \neq 0$ なので、 $|p_n| \neq 0$ よって、そのような M が存在する。

② $|p_m - p_n| < \varepsilon M$ を $|p_n|$ で割ると

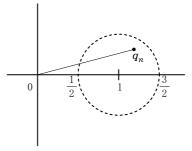
$$\mid a_{n+1} \cdots a_m - 1 \mid = \mid \frac{p_m}{p_n} - 1 \mid = \mid \frac{p_m - p_n}{p_n} \mid = \frac{\mid p_m - p_n \mid}{\mid p_n \mid} < \frac{\epsilon M}{\mid p_n \mid} < \frac{\epsilon M}{M} = \epsilon$$

③ なぜ
$$\frac{1}{2}$$
 < $|q_n|$ < $\frac{3}{2}$ となるのか。

$$\begin{split} &|\mid q_{n}\mid -1\mid =\mid \mid q_{n}\mid -\mid -1\mid \mid \\ &=\mid \mid q_{n}\mid -1\mid \leq \mid q_{n}-1\mid <\frac{1}{2} \end{split}$$

だからである。

q. が複素数であることに注意したい。



$$\textcircled{4} \mid \frac{q_{_{m}}}{q_{_{n}}} - 1 \mid < \varepsilon \rightarrow \mid q_{_{n}} \mid \mid \frac{q_{_{m}}}{q_{_{n}}} - 1 \mid = \mid q_{_{m}} - q_{_{n}} \mid < \varepsilon \mid q_{_{n}} \mid$$

(P. 389 例1)

 $\log t$ は連続関数なので、 $\forall \epsilon > 0$ に対し、 $\exists \delta > 0$

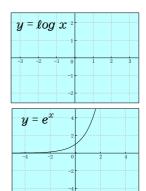
$$\mid t-1 \mid \langle \delta \rightarrow \mid log \ t - log \ (1) \mid \langle \epsilon \rangle$$

とすることができる。

 $\prod\limits_{n=0}^{\infty}e^{a_n}$ が収束すれば、 \forall $\delta>0$ に対し、コーシーの収束条件より n_0 が存在し $m>n\geq n_0$ ならば $\mid e^{a_{n+1}}e^{a_{n+2}}\cdots e^{a_m}-1\mid$ $<\delta$ とすることができる。

$$e^{a_{n+1}}e^{a_{n+2}}\cdots e^{a_m}=t$$
 とおけば

 $|a_{n+1}+a_{n+2}+\cdots+a_m|$ 〈 ϵ となる。 よって、 $\sum a_n$ はコーシーの収束条件をみたす。 逆に $|a_{n+1}+a_{n+2}+\cdots+a_m-0|$ 〈 δ となる n_0 が存在するので、 e^t は t=0 で連続だから \forall $\epsilon>0$ に対し \exists $\delta>0$ 、|t-0| 〈 δ ならば、 $|e^t-e^0|$ 〈 ϵ とすることができる。つまり $a_{n+1}+a_{n+2}+\cdots+a_m=t$ とすれば $|e^{a_{n+1}}e^{a_{n+2}}\cdots e^{a_m}-1|$ 〈 ϵ とすることができ、コーシーの収束条件をみたす。



(P. 389 定理6.1系)

コーシーの条件から、任意の $\epsilon>0$ に対し、ある n_0 が存在し、 $m>n>n_0$ ならば つまり、 $n+1>n>n_0$ ならば $|\frac{p_{n+1}}{p_n}-1|=|a_{n+1}-1|<\epsilon$ とすることができる からである。

(P.389 定理 $6.2 s_n < p_n$ について)

n=0 のとき $\mathbf{s}_0=\mathbf{a}_0$ 〈 $1+\mathbf{a}_0=\mathbf{p}_0$ よって、 \mathbf{s}_n 〈 \mathbf{p}_n と仮定し帰納法で証明する。 \mathbf{a}_{n+1} 〉 0 としてもかまわないので(もし、 $\mathbf{a}_{n+1}=0$ ならば、 $\mathbf{s}_{n+1}=\mathbf{s}_n$, $\mathbf{p}_{n+1}=\mathbf{p}_n$ なので除外して考えればよい。) $\mathbf{p}_n \ge 1$ であるから

 p_{n+1} = p_n (1+ a_{n+1}) = p_n + a_{n+1} p_n > s_n + a_{n+1} = s_{n+1} となり、証明された。

(P.389 定理6.3 三角不等式の使い方)

 $|1+a_{n+1}| \le |1|+|a_{n+1}|$ をそれぞれに使う。

(P. 390 定理6.4)

 $\sum\limits_{n=0}^{\infty}M_n$ は収束するので、任意の $\epsilon>0$ に対し、 n_0 \in N が存在し、m \geq n_0 となるすべての m \in N に対し

(6.6)
$$\sum_{n>m}^{\infty} \mathbf{M}_n \leq \varepsilon$$

となる。 なぜならば、 $\sum_{n=0}^{\infty} M_n$ は収束するので、任意の $\epsilon>0$ に対し、 n_0 $\in N$ が存在

し、 $m \! \geq \! n_0$ となるすべての $m \! \in \! N$ に対し $|\sum\limits_{n=0}^{\infty} M_n \! - \! \sum\limits_{n=0}^{m} M_n| \! \leq \! \epsilon$ 、 $\sum M_n$ は正項

級数で単調増加するので、書き換えると(6.6)になる。したがって

$$(6.5) \quad \| p_n - p_{n-1} \| = \| p_{n-1} (1 + a_n) - p_{n-1} \| = \| p_{n-1} a_n \| \le M_n e^{M}$$

から、 $m \ge n_0$ のとき

$$\sum_{n>m}^{\infty} \| \boldsymbol{p}_n - \boldsymbol{p}_{n-1} \| \leq \sum_{n>m}^{\infty} \boldsymbol{M}_n \boldsymbol{e}^{\boldsymbol{M}} \leq \boldsymbol{e}^{\boldsymbol{M}} \boldsymbol{\epsilon}$$

となり、
$$\sum\limits_{n=1}^{\infty} \| \, \boldsymbol{p}_n - \boldsymbol{p}_{n-1} \, \| = \sum\limits_{n=1}^{m} \| \, \boldsymbol{p}_n - \boldsymbol{p}_{n-1} \, \| + \sum\limits_{n\geq m}^{\infty} \| \, \boldsymbol{p}_n - \boldsymbol{p}_{n-1} \, \|$$

右辺の2番目の和が収束するので左辺が収束することがわかる。

また、関数項の級数

$$p_0 + (p_1 - p_0) + (p_2 - p_1) + (p_3 - p_2) + \dots + (p_n - p_{n-1}) + \dots ~~ は、 f_n = p_n - p_{n-1} \geq 1$$
 したとき

$$= \boldsymbol{p}_0 + \sum_{n=1}^{\infty} \boldsymbol{f}_n$$

となる。 したがって、P. 309定理13. 5(ワイヤストラスのM テスト)によって

- i) すべての $n \in N$ で $||f_n|| < M_n e^M$ をみたし
- ii) $\sum\limits_{n=1}^{\infty}M_{n}e^{M}$ は収束するので、 $\sum\limits_{n=1}^{\infty}f_{n}$ は一様収束する。

以上のことから

$$p_0+(p_1-p_0)+(p_2-p_1)+(p_3-p_2)+\cdots+(p_n-p_{n-1})+\cdots$$
 は一様収束する。
そこで、この級数の第 n 部分和は p_n なので、関数列として見れば、関数列
$$(p_n)_{n\in N}$$
 が A 上一様収束することになる。

連続については、 a_n が A 上連続ならば $1+a_n$ も連続であり、部分積 p_n も連続である。よって、IV章 定理13.3 から連続となる。

(P. 391 例3)

$$\mathbf{s} = \sigma + it (\sigma, t \in \mathbf{R})$$
と置くとき、 $|\mathbf{n}^{\mathbf{s}}| = |\exp[\log(n) \times (\sigma + it)]|$
 $= |\mathbf{e}^{\sigma \log(n)} \times \mathbf{e}^{it \log(n)}| = |\mathbf{e}^{\sigma \log(n)}| \times 1 = \mathbf{n}^{\sigma}$ だから、 $\sigma = \mathbf{Re} \mathbf{s} > 1$ のとき
 $\sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{\mathbf{n}^{\mathbf{s}}}$ は絶対収束する。(定理2.5) そこで複素変数 \mathbf{s} の関数

$$\zeta(s) = \sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{n^s}$$

が $Re\ s>1$ で定義できる。これをリーマンのゼータ関数という。この関数を最初に (実変数で)考えたのはオイラーで、彼は次のようにすべての素数 p の上にわたる 無限積で C(s) が与えられることを示した。

(6.7) オイラーの積公式
$$\zeta(s) = \prod_{p=s \pm \infty} (1 - \frac{1}{p^s})^{-1}$$
 (Res>1)

ここで、右辺の無限積は素数 p を小さい方から大きさの順に並べて p_1 = 2 , p_2 = 3 , \cdots としたときの $\prod_{n=1}^{\infty} (1-\frac{1}{p_n^s})^{-1}$ であるとする。(実は因子の順序には積は関係しない。)

このとき、
$$\sigma>1$$
 ならば $2\leq p_n^{\sigma} \to 0 \leq p_n^{\sigma}-2 \to p_n^{\sigma} \leq 2p_n^{\sigma}-2$

=
$$2(\boldsymbol{p}_n^{\sigma}-1)$$
 this $\boldsymbol{p}_n^{\sigma} \leq 2(\boldsymbol{p}_n^{\sigma}-1)$

$$\begin{aligned} & \mid a_{n} \mid = \mid (1 - \frac{1}{p_{n}^{s}})^{-1} - 1 \mid = \mid \frac{p_{n}^{s}}{p_{n}^{s} - 1} - 1 \mid = \mid \frac{p_{n}^{s} - p_{n}^{s} + 1}{p_{n}^{s} - 1} \mid = \\ & = \mid \frac{1}{p_{n}^{s} - 1} \mid = \frac{1}{\mid p_{n}^{s} - 1 \mid} \leq \frac{1}{\mid p_{n}^{s} \mid - 1} = \frac{1}{\mid p_{n}^{\sigma} - 1} \leq \frac{2}{p_{n}^{\sigma}} \end{aligned}$$

最後の不等号は

$$rac{oldsymbol{p}_{n}^{\,\sigma}}{2} \leq oldsymbol{p}_{n}^{\,\sigma} - 1
ightarrow rac{2}{oldsymbol{p}_{n}^{\,\,\sigma}} \geq rac{1}{oldsymbol{p}_{n}^{\,\,\sigma} - 1}$$
 ස්ථාර්ෆ්ක්රිං

つまり、
$$\sum_{n=1}^{\infty} |a_n| \le \sum_{n=1}^{\infty} \frac{2}{p_n^{\sigma}} \le 2 \sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{n^{\sigma}} (\sigma > 1)$$
 となり、P369 定理2. 5より

 Σa_n は絶対収束し、定理6. 2から (6.7)の右辺は絶対収束する。

ここで、
$$1+rac{1}{p_n^s}+rac{1}{p_n^{2s}}+rac{1}{p_n^{3s}}+rac{1}{p_n^{4s}}$$
 … という数列を考える。

 $p_n^\sigma \ge 2$ なので、この数列は絶対収束 (s が複素数に注意、また、s=1 でもよい) する。 なぜならば、m 項までの絶対値の部分和を S_m とすれば

$$\begin{split} & S_{m} = 1 + \frac{1}{|p_{n}^{s}|} + \frac{1}{|p_{n}^{2s}|} + \dots + \frac{1}{|p_{n}^{(m-1)s}|} \\ & = 1 + \frac{1}{|p_{n}^{\sigma}|} + \frac{1}{|p_{n}^{2\sigma}|} + \dots + \frac{1}{|p_{n}^{(m-1)\sigma}|} \le 1 + \frac{1}{2} + \frac{1}{2^{2}} + \dots + \frac{1}{2^{m-1}} < 2 \end{split}$$

であり、両辺を p_n^{σ} 倍して、上の式から引くと

$$\begin{split} p_{n}^{\sigma}S_{m} &= p_{n}^{\sigma} + 1 + \frac{1}{p_{n}^{\sigma}} + \frac{1}{p_{n}^{2\sigma}} + \dots + \frac{1}{p_{n}^{(m-2)\sigma}} \\ S_{m}(1 - p_{n}^{\sigma}) &= \frac{1}{p_{n}^{(m-1)\sigma}} - p_{n}^{\sigma} \\ S_{m} &= \frac{\frac{1}{p_{n}^{(m-1)\sigma}} - p_{n}^{\sigma}}{1 - p_{n}^{\sigma}} \to \frac{-p_{n}^{\sigma}}{1 - p_{n}^{\sigma}} = \frac{p_{n}^{\sigma}}{p_{n}^{\sigma} - 1} = \frac{1}{1 - \frac{1}{p_{n}^{\sigma}}} \quad (m \to \infty) \end{split}$$

そして次の等式が得られる。

(6.8)
$$\prod_{n=1}^{\infty} \frac{1}{1 - \frac{1}{p_n^s}} = \prod_{n=1}^{\infty} \left(1 + \frac{1}{p_n^s} + \frac{1}{p_n^{2s}} + \cdots\right)$$

ここで、(6.8)の右辺を展開することを考える。

 $Re\ s=\sigma>1$ であるから $\sum\limits_{k=0}^{\infty} \frac{1}{p_n^{ks}}$ は絶対収束する。したがってそれらの積は

P. 386 例3 により

$$(\sum_{k=0}^{\infty} \frac{1}{p_n^{ks}}) \times (\sum_{\ell=0}^{\infty} \frac{1}{p_m^{\ell s}})$$

$$= (1 + \frac{1}{p_n^s} + \frac{1}{p_n^{2s}} + \cdots)(1 + \frac{1}{p_m^s} + \frac{1}{p_m^{2s}} + \cdots) = \sum_{k,\ell=0}^{\infty} \frac{1}{(p_n^k p_m^{\ell})^s}$$

 $n \neq m$ のとき、右辺は絶対収束するので、P.374定理3. 4系から、どのように項の順序を変えても和は変わらないので、項の順序は大きさの順になっているとしてもよい。また、右辺の $p_n^k p_m^\ell$ は p_n と p_m のみを素因数とするすべての自然数 $n \ge 1$ の上にわたる $\frac{1}{m^s}$ の和となる。

例えば、 $p_1 = 2$, $p_3 = 3$ とすれば

$$\sum_{k,\ell=0}^{\infty} \frac{1}{(2^k 3^\ell)^s} = 1 + \frac{1}{2^s} + \frac{1}{3^s} + \frac{1}{(2^2)^s} + \frac{1}{(2 \times 3)^s} + \frac{1}{(3^2)^s} + \frac{1}{(2^3)^s} + \frac{1}{(2^2 \times 3)^s} + \frac{1}{(2^2 \times 3)^s} + \frac{1}{(2^2 \times 3)^s} + \cdots$$

$$=1+\frac{1}{2^{s}}+\frac{1}{3^{s}}+\frac{1}{4^{s}}+\frac{1}{6^{s}}+\frac{1}{8^{s}}+\frac{1}{9^{s}}+\frac{1}{12^{s}}+\frac{1}{18^{s}}+\frac{1}{27^{s}}+\frac{1}{36^{s}}+\cdots$$

同じことを m 個の積について考えると、P.385例3、定理3.4系を繰り返し使うことにより

$$\prod_{n=1}^{m} \frac{1}{1 - \frac{1}{p_{m}^{s}}} = \sum_{k_{1}, k_{2}, \dots k_{m}=0}^{\infty} \frac{1}{(p_{1}^{k_{1}} p_{2}^{k_{2}} \dots p_{m}^{k_{m}})^{s}} = \sum \frac{1}{n^{s}}$$

となる。ここで右辺は p_1, \cdots, p_m のみを素因数とするすべての自然数 $n \ge 1$ の上にわたる $\frac{1}{n^s}$ の和 (素因数分解の一意性から重複はない)となる。このような自然数には $n \le p_m$ となるすべての自然数が含まれているから $(n \le p_m$ となる自然数の集合を A とすると、1 、 p_1 、 \cdots 、 $p_m \in A$ である。また、n が合成数ならば p_m より小さい素因数の積で表すことができるので $n \in A$ となる。)

(6. 10)
$$\prod_{n=1}^{m} \frac{1}{1 - \frac{1}{p_{\infty}^{s}}} = \sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{n^{s}} = \sum_{n=1}^{p_{m}} \frac{1}{n^{s}} + \sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{n^{s}}$$

の形となる。ここで、 $\sum \frac{1}{n^s}$ は、 p_1,\cdots,p_m のみを素因数とし、 $n>p_m$ である自然数 n に関する和である。いま、 $Re\ s>1$ で $\sum\limits_{n=1}^{\infty}\frac{1}{n^s}$ は絶対収束するから、

$$\sum_{n \mid p_m} \frac{1}{\mid n^s \mid} \rightarrow 0 (m \rightarrow \infty)$$
である。したがって

$$|\sum^{n} \frac{1}{n^{s}}| \leq \sum^{n} \frac{1}{|n^{s}|} \leq \sum_{n \geq p_{m}} \frac{1}{|n^{s}|} \rightarrow 0 \quad (m \rightarrow \infty)$$

 (p_1, \cdots, p_m) のみを素因数とし、 $n > p_m$ である自然数 n)

が成り立つ。そこで、 $(6.\ 10)$ で $m\to\infty$ つまり $p_m\to\infty$ で $(6.\ 7)$ を得る。 オイラーの積公式は、リーマンのゼータ関数 $\zeta(\mathbf{s})$ が素数の分布に密接に関係していることを示す。例えば $(6.\ 10)$ からオイラーは素数が無限にあること、さらに強く素数の逆数が作る級数は発散することを示した。

まず素数が無限個あることを示す。

 $\sum\limits_{k=0}^{\infty}rac{1}{p_n^k}$ は絶対収束するから $Re\ s=\sigma>1$ に関係なく(6.10)は s=1 でも成

り立つ。

及ぶはずなので

したがって、
$$(6.\ 10)$$
の左辺を $p_m(\mathbf{s}) = \prod_{n=1}^m \frac{1}{1-\frac{1}{p_n^\mathbf{s}}}$ とおくと
$$p_m(1) = \sum_{n=1}^{p_m} \frac{1}{n} + \sum^n \frac{1}{n}$$
 \uparrow (p_1, \cdots, p_m) のみを素因数とし、 $n > p_m$ である自然数 n)

ここで、任意の自然数 $n \ge 1$ は一意的に素数の冪の積として表されるから、もし最大の素数を p_r とすれば、 $\sum^n \frac{1}{n}$ の n は p_r より大きいすべての自然数にまで

 $p_r(1) = \sum_{r=1}^{p_r} \frac{1}{r} + \sum_{r=1}^{\infty} \frac{1}{r} \ge \sum_{r=1}^{\infty} \frac{1}{r} \ge \sum_{r=1}^{\infty} \frac{1}{r}$

右辺は発散するが、 $p_r(1)$ は有限の値であり矛盾する。よって、素数が無限個あることがわかる。次に、素数の逆数が作る級数の発散についてだが、

$$\sum_{p=\bar{x}} \frac{1}{p} = +\infty$$

実際(6.10)の左辺に s=1を代入すると

$$P_{m}(1) = \prod_{n=1}^{m} \frac{1}{1 - \frac{1}{p_{n}}} = \sum_{n=1}^{p_{m}} \frac{1}{n} + \sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{n} \rightarrow \sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{n} (m \rightarrow +\infty)$$

である。級数 $\sum \frac{1}{n}$ は発散するから、 $p_m(1) \rightarrow \infty \ (m \rightarrow \infty)$ であり、

$$\prod_{p=\pm 3} (1 - \frac{1}{p})^{-1} \ (s = 1)$$

はs=1 のとき $+\infty$ に発散する。したがって、逆数の第m 因子までの部分積は、

$$\prod_{n=1}^{m} \left(1 - \frac{1}{p_n}\right) = \prod_{n=1}^{m} \frac{1}{\left(1 - \frac{1}{p_n}\right)^{-1}} = \frac{1}{\sum_{n=1}^{p_m} \frac{1}{n} + \sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{n}} \to 0 \ (m \to \infty)$$

つまり、

(6. 12)
$$\prod_{p=xy} (1 - \frac{1}{p}) = 0$$
 となる。

したがって、 $\sum\limits_{p={x\over 2}}{1\over p}$ が収束するとすれば、定理6. 2より、 $\prod\limits_{p={x\over 2}}(1+{1\over p})$ が収束し

$$\prod_{p=\bar{x}_{0}}\left(1+\left|-\frac{1}{p}\right|\right)=\prod_{p=\bar{x}_{0}}\left(1+\frac{1}{p}\right)$$

なので、定理6.3から、 $\prod_{p=\pi y} (1-\frac{1}{p})$ も収束する。つまり、0 でない値に収束するはずであるが、これは、(6.12)に反する。

(参考 Wikipediaーオイラー積)

$$\zeta\left(\mathbf{s}\right) = \sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{n^{\mathbf{s}}} = \frac{1}{1^{\mathbf{s}}} + \frac{1}{2^{\mathbf{s}}} + \frac{1}{3^{\mathbf{s}}} + \frac{1}{4^{\mathbf{s}}} + \frac{1}{5^{\mathbf{s}}} + \frac{1}{6^{\mathbf{s}}} + \frac{1}{7^{\mathbf{s}}} + \frac{1}{8^{\mathbf{s}}} + \cdots \quad (\textit{Re } \mathbf{s} > 1)$$

ここで両辺に最小の素数2の(-s)乗 $\frac{1}{a^s}$ をかけると

$$\frac{1}{2^{s}} \zeta(s) = \frac{1}{2^{s}} + \frac{1}{4^{s}} + \frac{1}{6^{s}} + \frac{1}{8^{s}} + \frac{1}{10^{s}} + \frac{1}{12^{s}} + \frac{1}{14^{s}} + \frac{1}{16^{s}} + \cdots$$

となり、上の式から引くと

$$(1 - \frac{1}{2^s})\zeta(s) = \frac{1}{1^s} + \frac{1}{3^s} + \frac{1}{5^s} + \frac{1}{7^s} + \frac{1}{9^s} + \frac{1}{11^s} + \frac{1}{13^s} + \frac{1}{15^s} + \cdots$$

となり、次に2の次の素数3の(-s)乗 $\frac{1}{2^s}$ をかけると

$$\frac{1}{3^{s}}(1-\frac{1}{2^{s}})\zeta(s) = \frac{1}{3^{s}} + \frac{1}{9^{s}} + \frac{1}{15^{s}} + \frac{1}{21^{s}} + \frac{1}{27^{s}} + \frac{1}{33^{s}} + \frac{1}{39^{s}} + \frac{1}{45^{s}} + \cdots$$

となり、再びすぐ上の式から引くと

$$(1 - \frac{1}{2^s})(1 - \frac{1}{3^s})\zeta(s) = \frac{1}{1^s} + \frac{1}{5^s} + \frac{1}{7^s} + \frac{1}{11^s} + \frac{1}{13^s} + \cdots$$

以上同様にして次々と素数の (-s) 乗をかけて前の式から引いていくという操作を続けると右辺の $\frac{1}{1^s}$ 以外の項は(素因数分解の一意性によって)消えるので

$$(1-\frac{1}{2^s})(1-\frac{1}{3^s})(1-\frac{1}{5^s})(1-\frac{1}{7^s})(1-\frac{1}{11^s})\cdots \zeta(s)=\frac{1}{1^s}=1$$

したがって、ゼータ関数は以下の形で表現される。

$$\zeta(s) = \frac{1}{(1 - \frac{1}{2^s})(1 - \frac{1}{3^s})(1 - \frac{1}{5^s})(1 - \frac{1}{7^s})(1 - \frac{1}{11^s})\cdots}$$

この方法は昔中学校で習った、エラトステネスのふるいと原理は同じである。 これで第 I 巻は終わった。